

霊基No.01 ナーサリー・ライム



PROFILE

身長：137cm 体重：30kg

童話から飛び出てきたかのような少女のサーヴァント。
マスターに愛されるためだったらわりと何でもする。

魔力供給回数：182回 絶頂回数：365回
好きな体位：正常位 処女喪失日：召喚から12日目

妊娠確率：82% 【危険日】

積極的にアタックしてくる。時には無防備な寝姿を晒し、
寝込みを襲わせようともするが、そういう時は
決まって危険日なのである。

STATUS

絆LV 100 
Next 

性欲：B	★★★★☆	知力：B+	★★★★☆
体力：D	★★☆☆☆	母性：C	★★★★☆
従順：A	★★★★★	反抗：D+	★★☆☆☆
淫乱：D	★★☆☆☆	感度：B	★★★★☆

「優しく愛してほしいのだね。ページをめくるみたいに少しずつ、ね。
でもジャバウオックみたいになっちゃう貴方もアリスは大好きよ♡」

霊基No.01 ナーサリー・ライム



SECRET GARDEN EX

SG1：寵愛願望

いつまでも大切にしてほしいという願い。
その想いは行為の中にも現れ、基本「一度」では終わらせてくれない。
「もっと続けましょ、マスター♡」

SG2：大団円主義

ハッピーエンドが大好き。
今現在の彼女にとってのハッピーエンドは
「マスターの子どもを妊娠して生涯を添い遂げること」である。

SG3：誰かの為の物語

この姿で愛されることに特別な想いがあるらしい。
なのでしっかり・たっぷり愛してあげよう。

WEAK POINT

nipple：★★★★☆

とても小ぶりで、可愛らしい色をしている。
「揉まれる」より「指先で弄られる」方が好き。

fanny：★★★★☆

ぴったり閉じた割れ目。まだまだ開発途中。
弄るとすぐに甘い声を出し、愛液を
可愛らしくびゅっびゅと吹き出す。

vagina：★★★★☆

膣内は非常に狭く、また駄々っ子のように
何度も締め付けてくる。引き抜こうとすると
やはり吸い付き、中々放してくれない。

LIVE



状態：♥♥♥

いつでも妊娠できる状態。
受精する日を今か今かと
待ち望んでいる。

人理継続保障機関、通称カルデア。

人類史をより確かに、より強く繁栄させ、より長きを見守るために設立されたこの組織は、2015年の現代において、百年先までの安全を見通した——はずだった。しかし、近未来観測レンズ「シバ」は、人類にとっての不吉な未来を観測する。

——2017年を以て人類は絶滅した。

それは遠くない未来に待ち受ける、世界の終わりを確定づける観測結果だった。

何の前触れもなく破滅は訪れる。何故という疑問を抱き、誰がという疑心に惑うカルデアの研究者たちだったが、彼らが導きだした結論は絶対的な運命を叩き出す。つまりは、人類の抗いようのない絶滅を、である。

これに、カルデアは絶滅を回避するための禁断の術式・グランドオーダーを発令した。

術者を量子化させ過去へと送り込み、絶滅の原因となった時空の特異点を発見、これを解明、あるいは破壊する。伝説の聖杯探索になぞらえた数奇なる運命への挑戦。俺は、その使命を背負った唯一の魔術師^{マスタ}だった。

もちろん、グランドオーダーなる前代未聞の挑戦には、自分一人の力で挑むわけではな

い。カルデアの現地職員や、頼れる後輩のマッシュ・キリエライトの存在。そして何よりも、サーヴァントの存在が不可欠だった。

「今日も爆死か……いや、まあ知ってたけどね」

マイルームのベッドで寝そべり、先程の召喚結果を振り返る。

右手にはなけなしの石が二つ。サーヴァントの召喚に使われた、その残り物だ。後悔と虚無感に悩まされながら、自分は部屋の天井を見上げていた。

「マスター、お疲れの様子ね。そんな時は本を読むと良いのだわ」

すると、ひょこりと覗き込むようにして唐突に少女の顔が現れた。

あまりに幼い目鼻立ち。まるで童話の世界から飛び出してきたような出で立ちの少女は、カルデアに存在する数少ないサーヴァントの一人……：……ナーサリー・ライム、アリスという少女だった。

マイルームのセキュリティなんて在って無いようなもの。こうしてアリスが押しかけ

てくるのは珍しい事でもなく、寧ろ日常的に見られる光景だ。

「今日はこの本を読むの。うふふ、マスターと一緒に読みたくて、ついつい張り切って選んじゃったわ。さあ、一緒に楽しみましょう？」

そう言ってアリスが膝上に座ってくる。

俺に本を渡して、読み聞かせてほしいという事だろう。

この体勢も身体の小さい彼女とだからこそ出来る芸当だ。

「……と、言う事で。みんなに悪いことをしたゼパル君は、無事に退治されましたとさ」

「ハッピーエンドね！ すてきな結末よ、すごく楽しかったのだから！」

本を読み終えると、アリスは大変満足して喜んでいた。

他愛のない、何処にでもあるような絵本だ。それでも少女は至福の時間だったと満面の笑みで喜んでいいる。何にせよ、彼女が満足してくれたなら俺も嬉しい。読み手として、マ

スターとして、冥利に尽きるというものだ。

「……………」

「ん？ どうしたの、アリス」

不意に少女がじっと自分を見つめてくる。

やがて口を開くと——

「今回は誰を目当てに召喚したのかしら？ やっぱり巨乳のサーヴァント？」

「！？ や、やっぱりってどういうことかな……………！！？」

アリスの一言に、心臓がどくと跳ね上がる。

7 「だってマスター、いつもロマンおじ様に愚痴を言ってるのだけ。『カルデアには子供しか

いない』『もっと大人なサーヴァントが欲しい』って……」

(聞かれてた……!)

「それにベッドの下にはマスターのお気に入りのお宝が入ってるわ！　どれもこれもおっぱいの大きな女性が出てくるエッチなご本だわ！」

(隠してたのバレてる——!?)

少し不貞腐れたように呟くアリス。

愚痴の一件や、Rな本のこととはともかく、彼女の台詞は正確だ。

このカルデアには、どういうわけか子供サーヴァントしか存在しない。大人と呼ぶには程遠く、少女ではなく寧ろ幼女と形容するべき外見の女の子たち……何故か、そんな子たちしか召喚に成功しなかったのである。

男として、大きな胸に憧れるのは本能ゆえに当然のこと。第一特異点で出会ったジャンヌや、第二特異点で知り合ったネロ。彼女たちがカルデアに来てくれたなら、それはそれ

は色々と拗つただらう。巨乳イズ最高。大きいおっぱいこそ至高である。

「なんてこと！ マスターってばジャバウォック以上の野獣さんだわ！」

俺がそう言うと、アリスが頬を真っ赤にして叫び出した。

ついでに拳が繰り出され、胸をポカポカと叩かれる。威力は大したことなく、しばらく彼女の好きなように任せていたが……唐突に拳が止まる、アリスの様子が急に静かになる。

「……そんなに、大人な女性が好みなの？ アリスわたしの身体には興味ないのかしら？」

「興味、って……え？ え？」

もじもじとした様子の少女が発した、聞き逃してしまいそうなほどに些細な呟き。その意味を理解しようと思いを巡らすよりも早く、視界に少女の唇が飛び込んだ。

「ッ——！？」

「ん、ちゅ……っ、んむ、ん……♡」

思考が混濁する。動悸が加速する。

抵抗を試みる間もなく、アリスの淡い桜色の花弁はこちらの唇を奪っていった。少女の甘い味わいが口内に広がっていき、初めての感触に血液が沸騰する。

「ん、んっ……ふはっ！ ア、アリス、いったい何を……!?!」

「……マスターが悪いのだわ」

口と口を強引に突き放すと、名残惜しそうに少女が顔を伏せて言った。

「だって、こうでもしないと私の思いが伝わらないもの。マスターはもっと大人な女性が好みだよだし、多少強引に行かないとハッピーエンドが逃げちゃうわ」

「それって……」

「貴方はわたしの大切なマスター。わたしという物語を何度も拾って読み直してくれる最高の読者。そんな貴方に——本が人に恋をするなんて、変かしら？」

照れくさそうにアリスは笑った。

緊張と嬉しさをない交ぜにした、恋をする少女の笑顔だった。

「さ、始めましょ。最後のページまで愛してね♡」

∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞

「んう、んちゅっ……♡　じゆる、ちゅば、んんっ、んちゅう……ん、あむ……♡」

少女の小さい舌先が積極的に口内を駆け回る。

静かな部屋の中に、淡い呼吸音と唾液の跳ねる音とが交互に響き合っていた。

「あつ、ん、んむっ、ちゆるう……♡ ふあ、まふはあ……むじゆるるっ……ん、ちゅ、ちゅば、ん、ん、すきい、ちゅ……♡ ん、もつと、キス、しましよ……ん、ぢゆる、ぱちゅっ……♡」

幼い少女とは思えないほどに熱烈な要求。自分はされるがままにそれを受け入れる。快感と羞恥とに思考を溶かされ、どうしてこうなったと考える事すらままならない。ただ、それは紛れもなくキスという行いだっただ。愛情を証明する確かな行為だった。こんな事をされて何も感じない筈がない。それがたとえ小学生程度の外見の幼子だったとしても、意識は自然と彼女を求める方向に傾倒していった。

「ん、ふうっ、んんう……はあ、えあつ、マスターのだえき、すごく美味しい……甘くて、とろとろしてて……ん、じゆるっ、ちゅぷう、ずじゆるるっ……♡ はあ、はあ……はむうっ、ちゅ、ぴちゃ、ん、んう、うんん……♡」

絶えずして少女の唾液が流れ込んでくる。

理性は決壊したダムのよう。ダメだダメだと言い聞かすが、自分の舌は彼女のそれを絡み取るように動いていた。アリスもそれに気づいてか、積極的だった舌先の動きを更に加速させる。まるで唾液を交換するように。非常に甘露な蜜液が口内に溜まっていった。

「ちゆく……ん、ちゅむっ……ん、ふう……じゆる、ちゅぶ、んちゅう……♡」

全身を興奮という名の赤い感情に満たされていくのが分かる。

止まらない——それを理解した瞬間、タガが外れたように少女を求めました。

「ん、んんっ……！！ ひゃう、ます、たあ……急に、激しく……ん、んじゅ、んっ、んむううう……！！ じゆる、ちゅぶあ、んん、むう、んちゅう、ぢゅう……ん、ふう、えお、んうう……♡」

アリスは苦しそうに目をギュッと閉じた。

今や立場は互角か、こちらが優勢といった具合だ。する側だった筈の少女は思わぬ抵抗に遭い、される側へと今まさに堕ちかけている。それでも少なからず負けず嫌いの性格が

「あむ、んむっ……んぢゅ、ちゅくっ、んちゅうっ……♡」

小さい。とにかく狭かった。

自分の舌一つで彼女の口内全てを蹂躪する事が可能なほどに狭小とした空間。

互いに呼吸も忘れ、マーキングするように唾液を塗りたくる。それは蹂躪であり、浸食。アリスという少女を自分はただひたすらに侵し尽くす。

「ちゅっ、ん、ちゅうう……ぢゆる、ず、んじゅ、ずずっ……ぶ、あっ……ねえマスター、アリスとのキス、気持ちいい……？ うまくできてるかしら……んっ♡」

切なげな瞳で尋ねてくるアリス。

自分も息も絶え絶えにしながら「もちろんだ」と答え、口内の愛撫を再開、彼女の深いところまで舌を潜り込ませていく。

「ん、ふう、んっ、ちゅっ……♡」

忙しなく運動する舌の交わり。それは単なる触れ合わせるだけのキスではない。より深くまで届いた大人の口づけだ。舌先を通して、相手の体温が十分に伝わってくる。

「マスター、ドキドキしてる……んっ、私もよ……ちゅ、んうっ、んんんう……んんあっ、はあっ、あむう、ん、んんっ、ちゅ……キス、すごいのだわ……♡」

「っ——アリス……!」

「ねえ、マスター……こっちも触って……んっ、アリスのおっぱい……貴方に触ってほしくて、こんなに熱くなってるの……ん、はあっ、ひゃああっ……♡」

すると、どうした事か。

必死にディープキスが続けていた少女は、唐突にこちらの手を握りしめてくる。

掴まれた自分の右手はそっと彼女の胸元——その敏感な部分へと寄せられていき、触

れた瞬間、アリスは甲高い悲鳴を泣き叫んだ。

「んんっ……！　ますたー、だめえっ……んんあっ、はっ、なに、これえ……すごく、気持ちいいのだから……♡　マスターに触られた部分が、びりびり、しちゃって……ん、んむっ……♡」

大きいとは呼べないが、決して無いとは言えない少女の膨らみ。

手のひらは、僅かに盛り上がった双丘の上をひた走る。

彼女の方から求められた事とはいえ、拒むつもりは何処にも無い。もちろん唾液の交換も続けたまま、少女の肉体そのものへの愛撫を開始した。

「やっ、はあっ、おっぱいが……くすぐったくて……ん、ちゅっ、んむう、じゆるるる……♡　マスター、もっと弄って……ん、ああっ、ひゃあっ、んんっ……アリスの小さなおっぱい、もっと気持ちよくしてえ……んんっ！！」

言われなくともそのつもりだった。

いつもは天真爛漫な外見通りの性格をした少女が、これほどまでに快楽を求めているのだ。

女の奥底に隠された雌としての性質。その光景には抗えない魅力が、魔力が存在する。快楽に苦しむアリスの相貌には、幼女が見せるはずのない卑猥な色に染まっていた。

「あっ、んああ……！ マスター……そこお、ん、くう、ふうう……そんなに、されたらっ、んん、痺れちゃうわ……やあつ、あんつ、ふああ……♡」

右手はやがて少女の胸元、その頂点にある突起を探り当てた。

服の上からでも分かるほどに勃起した少女の小粒。小指の先程度の頂き。

摘まむようにしてそれを指で挟むと、アリスが一際強く嬌声を上げた。如何に幼女とはいえ、感じる事には感じるのだろう。

「はっ、あっ、だめっ、だめえっ……！！ すごいの、来ちゃうわ……♡ 大きいのが来て、イケナイ気持ちになっちゃうのだわ……ん、んむうう……♡」

全身をぶるぶると震わせるアリス。その様子に自分の興奮も最大限まで高まっていき、キスをする余裕さえ無くなった少女の口内に強引に舌を突っ込んだ。

胸の突起から生じる快感と、口内を満たす激しい快楽。二つの未知なる衝撃。

やがてアリスの身体は限界に達し、自分もまた全力でスパートを掛けた。喰らい尽くすほどの勢いで以て少女を求め、そして――

「んっ、んんんんっ………♡」

瞬間、アリスの全身がびくんっ、と震えあがった。

一段と強い震えのあと、小刻みな振動が続いている。孤独に怯える迷子のように。俺の身体に縋り付いてきた少女は、初めての心地に驚いている様子だった。

「ん、ふうっ……ちゅぽっ♡ はぁ……はぁ……まるで夢を見ている気分だわ……ふわふわして、自分が自分でなくなった感じ……絵本の世界へ連れていかれた気分かしら……」

「アリス……」

「ふふ、情熱的な時間だったわマスター♡ 大好きな人とのキスって、こんなに気持ちが悪くなるものなのね。アリス、すごく幸せよ」

恍惚とした表情で微笑むアリスは、疲れ切ったようにベッドに寝そべった。

一先ず落ち着いて、罪悪感が湧いてくる。こんな小さな子に、口づけだけならばまだしも胸まで触って……挙句の果てに絶頂^{イカ}してしまったのでは、言い訳の余地が無いほどに犯罪的だ。お先は真っ暗だった。

「ごめん、アリス。終わ^つた後^で言うのも何だけど、この事は誰にも……」

「ふふふ、マスターっては何を言ってるのかしら。ここ^かからが本番^ででしょう?」

アリスが面白そうに笑う。終わりだと思っていたのは、どうやら自分だけのようだ。

「おねがい、マスター……アリス^わの『ここ』、貴方のお……おちんちんが欲しくて、こんな

にも震えているわ。貴方の好みには合わないかもだけど、恋人らしく……優しく愛してほしいのだけわ」

仰向けに倒れているアリスは、自らの秘部を広げてそう言った。

スカートをめくり、脚部を覆う紫のタイツを半分脱ぎ捨てて……M字に折り曲げられた少女の脚の隙間からは、アリスが女性である事の証とも言えるべきそれが見えている。

(これが女の子の……！)

初めて見るその部分に、自然と目は釘付けにされていた。

スカートにも下着にも守られていない未知なる景色。縦一筋の亀裂は、少女がいまだ成熟しきっていない事を証明する。だが、アリスはそれをあろうことに広げていたのだった。

「う、あうんっ……み、見てえ、マスター……！ 恥ずかしいけど、大好きな貴方のためだもの。ぜんぶ、しっかり見てもらわないとね……♡」

幼いスジを左右に開いて、アリスは恥辱に苦しみつつも俺を誘惑する。

見えたのは桜色の膜のような部分だ。ひくひくと寂しげに振動する少女の蜜壺。男のものを挿れるにはあまりに狭く、小さい、そして幼かった膣の入口……けれど、これまでの行為で十分にそこは濡れ、欲しがるように涎を垂らしていた。

「……いいのか？」

「ええ……その代わり、優しく扱ってほしいのかわ。アリスは貴方のサーヴァント、貴方の夢物語……だけど、今この瞬間だけは本物の恋人にさせて。誰でもないわたしに、本当のハッピーエンドを教えて……♡」

止められるわけはなかったが、それでも最低限の理性で以て聞き返す。
しかし、かえってそれは自分の衝動を爆発させる結果に終わった。

「きゃっ……！ わ、わたしたち、ついに結ばれるのね……恋人同士になれるのね……！」

押し倒すようにアリスに覆い被さると、互いの心臓の音がハッキリと聞こえてきた。自分のすぐ下では少女が今か今かと待ち構えている。少なからず恐怖はあるのだろう。俺がズボンの内側から取り出したそれを見て、アリスは恐ろし気に目を見開いた。

(あ、あれがマスターのおちんちん……ご本で見たのとは、ぜんぜん違うのだわ……！)

外界に放たれた自らの分身とも呼ぶべき剛直。

肉棒は限界寸前まで反り立ち、亀頭は赤く充血しきっていた。

「……それじゃあ挿れるよ、アリス。痛かったらすぐに言ってね」

「え、ええっ……でも、すごく怖いのだわ。あんなにおっきなもの……本当に入るのかしら??」

アリスは不安そうに見つめている。

とは言っても、やめるといふ選択肢は考えていなかった。だから、せめて不安だけでも

和らげてもらおうと、アリスの小さな手を握りしめてみる。恋人のように、指を絡める握り方だ。

「……ぜったいに離さないでね、マスター。最後までこのままがいいわ……んっ！」

やがて、ついにはアリスの女性器に己の肉棒をあてがった。

幼女を男の膂力で押し倒すこの体勢のせいで、凄まじい背徳感と征服感に襲われる。亀頭の先端は少女の雌穴と軽くキスをして、今まさに己の処女を奪われる瞬間をアリスはまじまじと見つめていた。

そして――

「んっ、んうう、んああああっ……♡」

腰を一段と強く押し付け、肉棒を少女の膣内に押し込むと、心地よい嬌声が広がった。傘のように開いた亀頭がミチミチと膣を掘削していく。

あまりに狭く、それを強引にこじ開けたとあっては、肉の裂けるような音が響いて当然

だ。アリスのロリスジからはつーっと血が流れ落ち、痛みに苦しむ彼女の表情を見て思わず「大丈夫か？」と声を掛けた。

「う、うん……！ 痛いけど、この涙は嬉しくて泣いてるのかわ……！ だって、ようやく大好きな貴方と一つに繋がれたんだもの……最高のハッピーエンドかわ！」

痛みはある。けれど、アリスはとても幸せそうに微笑んだ。

その笑顔がとても魅力的で……自分の体温が上昇していくのが分かった。とてもじゃないが、我慢なんて出来るはずがない。情けない話、俺は彼女に魅了されていた。

「それじゃあ、動くぞ……！」

「来て、ますたー！ アリスのこと、いっぱい愛して——んっ、ふう、んあああっ……」

その瞬間、肉棒は膣内への蹂躪を開始した。

「ひうう、はっ、ああっ！ ……ま、マスターの、すごいわ……おちんちん、硬くて、熱くて……わたしの膣内なを、好き勝手に暴れて……ん、あっ、はっ、あくうっ……♡ も、もつと優しくしてくれないと、すぐにイッちゃいそう……んんっ！！」

自らの体内で稼働する雄の象徴に、アリスはすっかり雌の本性をさらけ出していた。

陰茎は少女の膣道をこれでもかと蹂躪する。人並みサイズのそれでも、身長130センチメートル台のロリサーヴァントには巨大にすぎたようで、ストロークを初めて数十秒、亀頭は少女の最奥を到達する。

「やつ、そこっ、らめえ……！！ んにゃ、あっ、あ、あ、ああん……！！ ますたーのおちんちん、わたしの深いところを、こっこつって、叩いちやってるのだわっ……♡」

子宮を叩いたその感触に、アリスが幼女らしからぬ艶めかしい声を叫び出した。

口を大きく広げ、涎を垂らす。だらしな表情ではあったが、今のアリスにはそれを隠すだけの余裕が無くなっているのかもしれない。破瓜の痛みに不安を覚える事もあったが、

この様子ならば心配もないだろう。

「すごいわ、すごいわ……！　こんなに気持ちよくなった事なんて、生まれて初めてよ……
ん、はあっ、ああんっ……♡　大好きな人と繋がるのって、んっ、こんなにエッチな気持ちになるのね……！！」

肉棒は、まるで慣らすかのように少女の雌穴を広げていく。

男を受け止めた事のない閉じ切った空間に、さながら自分のカタチを刻み込むように。狭小とした膈壁を押し分け、少女の膈を自分専用の穴へと作り替えていく。

「あ、あつ、ん、こんら感覚、初めて……もっろ、いっぱいしてえ、マスター……♡」

呂律が回らないほどにとろけた様子のアリス。

必死に腰を打ち付け、ペニスの挿入を繰り返していると、その中でふと、アリスが悲しそうに目を伏せた。その理由を尋ねてみると――

「だって、んっ、マスターの好みは、おっぱいのおっきな女性でしょ……あ、んっ、こんな身体じゃ、満足できないわよね……で、でも、貴方が望むなら、私も——んむううっ……!？」

台詞を遮るように、アリスの唇を自分のそれで塞いでやった。

彼女が何を言おうとしたのか……何となくだが理解できる。

アリス——真名をナーサリー・ライム。英霊としての彼女は極めて特殊だ。本来決まったカタチを持たず、彼女はマスターの望む姿で召喚されると言われている。今は諸事情により子供の姿を取っているが、その気になればマスターの思う通りの姿を取ってくれるらしい。

だから、その必要は無いとハッキリ伝えた。

そのままでもいい、そのままでもいい、と。アリスが望んだ姿でいてくれることが、俺にとっての望みなのだ。わざわざこちらの嗜好に合わせる必要はまったく無い。

「ありがとう、マスター……!! 大好き、大好きっ、すごく愛してるわ……♡」

そう言うと、アリスが一段と激しく快楽を求めだした。

小さな身体で必死に男の欲望を受け止める姿には、実に背徳的なものがある。

「ひう、ああっ、はっ、んああ……っ！ ましゅ、たあ……♡ もう、限界よ……限界だわ、これ以上は壊れちゃうわっ……♡」

結合部から弾け出す愛液の量がベッドシートに水たまりを作り始めた頃、アリスの膣内が小刻みな震えを刻み出した。

少女の幼い膣内がきゅうきゅうとペニスを縛り付ける。屹立した陰茎を啜え込むアリスの雌穴は、いやらしく涎を吐き出していた。限界というのは本当だろう。積もり積もった快楽は爆発する寸前にあった。

「いつ、いつひゃう、エッチなのが止まらないっ……！ ましゅらあのおちんちんで、イキそうになっちゃってる……あっ、はっ、ん、んんっ、あんっ、ああん……♡」

限界なのはこちらも同じだ。

少女の膣ヒダにきつく絞られて、射精感の先まで上り詰めていた。

「く、ううんっ、ま、ますたー……！　ぎゅって、抱きしめてっ……一緒にイキましょ……！」

「っ……！」

アリスが両手をあげ、子供のように求めてくる。

その姿に我慢ならず、自分は射精間近にある肉棒を押し付け彼女の身体を抱きしめた。より深く結合した事で、アリスの嬌声がますます激しくなる。両腕と両足で俺を離すまいと強く縋り付き、瞳をギュッと閉じてその瞬間を待った。

「あっ、あ、あ、ますたーのおちんちん、膨らんでるのが分かるわ♡　精液、出ちゃうのね、んっ、んあ……知ってるわ、赤ちゃんって、こうやって作るのねっ♡」

爆発寸前にあつた欲望に、その言葉は致命傷だった。

固く閉ざされていた子宮口。その奥にあるのは子供を宿すための女性だけの空間だ。そこに精液を注がれる事の意味を知って、アリスはそれを寧ろ喜んで受け入れた。

「アリスの子宮おなか、マスターの精液でいっぱいにしてっ♡ おちんぼの先から、いっぱいっばい吐き出してっ……♡」

ペニスがラストスパートに入る。

快楽に溺れた少女の叫びに急かされ、肉棒に蓄積した獣欲の全てが解放。

子宮口に亀頭を押し付け、それは、一番深いところで爆発された。

「ましゆたあ、んっ、んん、んあああああ——！！！！！！」

ビクビクと放出される精液。少女の膣内に放たれる白濁。

恋人のように抱きしめ合いながら自分は、一滴残らずその全てを注ぎ込んだ。

「んっ♡ あっ♡ ああっ♡ んんんっ……♡」

一方で、アリスもまた絶頂を迎えられた事を理解した。

幼女の身体には過ぎた快楽だったのか、思わず不安になるほどの激しさでアリスは乱れている。初めてとなるセックス、そして膣内射精の快楽に、思考が完全にとろけきっていったようだ。

「はあ……はあ……大好きよマスター、最高のハッピーエンドだったわ……」

絶頂の余韻に浸るアリスは、虚ろな様子で呟いた。

その間も肉棒は少女の幼穴に精液を小刻みに吐き出して、やがて全ての精液が注ぎ込まれると、アリスは糸が切れたように気を失った。

∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞

——マイルーム。

「うふふ。美味しいわ、この紅茶。マスターもそう思うでしょ？」

「うん、そうだね……」

事後、俺とアリスは一時のティータイムを楽しんでいた。

ベッドに腰かけた自分の、更に膝の上。そこが定位置と化したのか、アリスはちょんと可愛らしく座っている。そして紅茶をぐいっ、と。普段お茶会に使用している茶葉と何も変わらないはずが、今日だけは格別だと少女は語る。

(やってしまった……こんな小さな子に手を出してしまった……)

反対に、自分はひたすら苦い思いを噛み締めていた。

背徳と罪悪感、後悔と自虐を含んだ苦みである。手錠を掛けられても仕方ない。

「心配しないで、マスター。そういう性癖の人はきつと珍しくないと思うのだけ。それにマスターの気持ちはちゃんと届いているもの。何かあってもアリスが助けてあげるわ、ふふ」

いや、それは誤解だ。今回の事は衝動に身を任せたが故の過ちというか……とにかく、自分にそのような変態的嗜好は存在しないのである。それを理解していただきたい。

「これからもよろしくね、わたしの最高の読者さん♡」

そう言ってアリスが身体を自分に預けてくる。

そのとき向けられた笑顔にドキッと心がざわついたが、気のせいだと思っておこう。

霊基No.02 ジャック・ザ・リッパー

PROFILE

身長：134cm 体重：33kg

世界中にその名を知られるシリアルキラー。
「子作り」に大変興味がある模様。

魔力供給回数：156回 絶頂回数：278回
好きな体位：背面駅弁 処女喪失日：召喚から47日目

妊娠確率：33% 【安全日】

まだまだ時間が掛かるかもしれないが
着床するまで根気強く膣内に注いであげよう。
もしかするとあっさり妊娠して……？

STATUS

絆LV 100 ♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥
Next 0

性欲：C++	★★★★☆	知力：D++	★★★★☆
体力：C	★★★★☆	母性：B+	★★★★☆
従順：A+	★★★★★	反抗：D	★★★★☆
淫乱：E	★★★★☆	感度：B	★★★★☆

「ねえねえ、おかあさん。赤ちゃんって
どうやって作るの？ 教えて、教えてっ！」



霊基No.02 ジャック・ザ・リッパー SECRET GARDEN EX



SG 1 : 純真無垢

基本的に無知なため、子作りについても目下勉強中。
ただ頭の回転は早いので瞬間的に物凄いことを閃いたりもする。

SG 2 : 解体趣味

とりあえず「解体」。何でも「解体」。
初めは自分のそれを「解体」されそうになったのは良い思い出。

SG 3 : 回帰願望

母親の胎に回帰したいという、彼女の本来の願い。
だがカルデアに召喚されたことで、
一方では「自分が産んであげたい」と切望している。

WEAK POINT

nipple : ★★★★★☆

ツニと主張し、柔らかく尖った形状の乳首。
妊娠したらいずれ母乳が出てくることを
教えたら瞳を爛々と輝かせた。

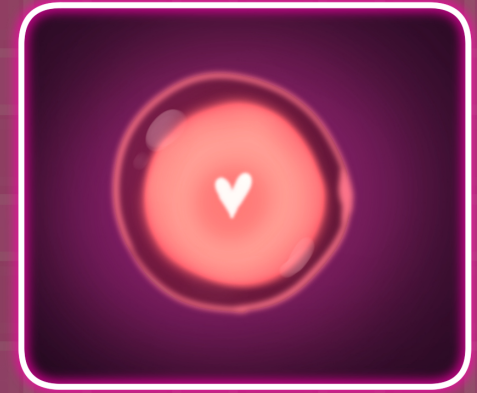
hip : ★★★★★★

カウチの良いお尻。程よく引き締まり、
また吸い付くような弾力を兼ね備えている。
また骨盤は赤ちゃんにも優しい
ハート型をしているそうだ。

vagina : ★★★★★☆

いまだ穢れを知らない、処女同然の膣内。
ピチピチと閉じたそこを強引に広げられると
気持ち良さそうに鳴く。また子宮の位置は
随分と浅い所にある。

LIVE



状態 : ♥♥♥

比較的排卵のペースは
緩やかで、受精を待ち望む
本人と対照的。これは心の
奥底で妊娠三母親になる
ことに若干の不安を覚え
ているせいかもしれない。

「此よりは地獄。わたしたちは炎、雨、力。殺戮をここに。——
解マリア・ザ・リップ体聖母！！」

斬撃が空を駆る。闇夜を忍ぶかの如き一閃が敵を切り裂いた。

地上へと落下する一つの影。墜落したのは一体の翼竜、その死骸だ。今まさに翼と命を切り落とされた翼竜は、悲鳴を上げる事もなく絶命する。

「よいしょっと……うん、楽勝だねっ♪」

そして呼吸無き怪物の側には、一人の少女が降り立った。

ただの短刀二本で怪物を仕留めて見せた少女は愉しそうに笑う。まだほんの十歳程度の子供にしか見えないのだから、本当に驚きだ。

「うーん、どこだろう？　ここかな？　……あった♪　ねえねえ、おかあさん。おかあさんの探してたの、見つけたよ。これで今日の“みっしょん”は終わり？」

てとてと……少女がその手に数本の『牙』を乗せて走ってくる。

彼女の真名はジャック・ザ・リッパー。カルデアに召喚された英霊の一騎、アサシンのサーヴァントだ。見た目は完全に幼女なのだが、サーヴァントである以上、その力は人間の常識を超えている。

そんな彼女と二人、俺たちが訪れていたのは翼竜の棲み処とされる高原だった。レイシフトした先でエネミーの悉くを狩っていたのも、サーヴァントの霊基を強化させるために必要な『素材』を収集するためである。無事に『竜の牙』を幾つか手に入れたところで、今日の作戦を終了した。

「えらいぞ、ジャック。やっぱり ワイバーン ライダーには ジャック アサシンが一番だな」

「えへへっ……おかさんに褒められちゃった♡」

彼女の持つて来てくれた『牙』を受け取り、労いの意味を込めて頭を撫でてあげる。

可愛い、可愛い、アンド、可愛い。ジャックは見た目だけでなく、内面も子供らしくて本当に愛らしい。つつい抱きしめちゃったが是非も無い。

「わっ！ お、おかあさん……急に苦しいよお」

「ごめんごめん。ジャックが良い子なのがすごく嬉しくてさ」

「わたしたち、良い子？ ご褒美くれる？」

「うんうん、あげちゃうあげちゃう。なんでもあげちゃう」

そう言った瞬間、ジャックの顔がぱあつと輝いた。ご褒美を貰えると知って、何にしよ
うかワクワクそわそわしている感じだ。

自分としても悪い気はしない。ジャックには何かとお世話になってるし、ワイバーン狩
りの時はいつも力を借りている。彼女のお願いを聞き遂げるくらい、ワケもない事だ。

「えっとね、おねがい、一つ浮かんだよ？」

やがて、少女の中でも『お願い』が決定する。

だから「それは何？」と尋ねると、ジャックは可愛く上目遣いを向けて告げた。

「その前に……おかあさんに教えてほしい事があるんだ。質問、してもいい？」

「うん、いいよ。何でも答えてあげる」

「じゃあじゃあ、赤ちゃんの作り方を教えて！」

そして、ジャックの口から予想の埒外を突く『質問』が飛び出した。

数秒思考が停止する程の……思いもよらない言葉と内容。聞き間違いを疑うレベルであり得ない質問だった。……ええとジャック、自分の言った事の意味わかってる？ だいた、どうしてそんな事を知りたいと思ったのかな？

「最近アリスがね、『た、大変だわ……赤ちゃんが出来ちゃったらどうしましょう……えへへ』って言うてるから気になったの。アリスに聞いても教えてくれなかったし……おかあさんなら教えてくれるよね？」

「アリスウ——ッッ——！」

「ねえねえ、おかあさん。おしえて、おしえて！」

「む、う……！」

キラキラと輝く好奇心。ジャックが瞳を光らせて迫ってくる。

その視線には無邪気ゆえの力強さを感じられた。何でも答えるとは言ったが、流石にこれはどうなのか。幼女への性教育なんて進○ゼミでもやってなかったし、第一すごく恥ずかしい。自分にも答えづらい質問は存在する。

「う、うーん。それはまた今度にしようか、ジャック」

「なんで？ おかあさん、なんでも教えてくれるって言ったよ？ 約束……やぶっちゃうの？」

ジャックの無邪気な視線が突き刺さる。今にも泣き出しそうな瞳でこっちを見ている。期待を裏切るようで悪いが、彼女には他の事で手を打ってもらおうとしよう。時間が経てば興味も薄くなるだろうし、もう暫くの辛抱だ……と自分に言い聞かせ、その考えが浅はかだった事をいざれ理解した。

——後日、食堂にて。

「ねえねえ、おかあさん。赤ちゃん、赤ちゃん」

「……………」

——後日、会議室にて。

「赤ちゃん、まだかな？」

「……………」

——後日、資料室にて。

「はやく赤ちゃん（の作り方を教えて）ほしいな♪ ね、おかあさん♡」

「……………」

——後日、男子トイレにて。

「赤ちゃん（の作り方をおしえて）くれるって、ちゃんと約束したはずだよ？」

「……………」

あれ以来、ジャックは事あるごとに「赤ちゃん」という言葉を繰り返して唱えていた。場所も時間も状況も考えず、そこに誰がいてもお構いなしである。ああ、これはマズイ。非常にマズイ。何がマズイかって言うと、カルデアにおける俺の信用がヤバイ。

こんな幼女に「赤ちゃん」などと言わせては、まるで自分が手を出したようではないか。まったくけしからん。そんな誤解は絶対に避けたい事である。しかし、今のままではジャックが諦めてくれるよりも誤解が広まる方が圧倒的に早いだろう。

かくなる上は――

「……参りました、ジャックさん」

「うわあい！ おかあさんに勝った！」

ジャックがびよんびよんと跳ねて歓喜する。

彼女は今までのそれを、ある種マスターである自分との勝負事のようにも思っていたのだろう。つまりは俺の負け。ジャックの粘り勝ちである。

「それじゃあ赤ちゃんの作り方、わたしたちに教えてくれるんだよね？」

「うん、教える。教えるからもう勘弁して」

マイルームに連れ込んだところで、泣く泣く土下座。ジャックのお願いはちゃんと叶えるからと、そのように手を打った。

期待に満ちた表情でこちらを見つめているジャック。瞳は好奇心に染まり、身体は興味に震えている。うやむやに流せなかった事は悔やまれるが、こうなってしまった以上は仕方ない。何事も手を抜くのは失礼にあたるだろうし、ゆえに自分も決意した。

やるからには全力で。実例を用いて教授する。ジャックには、自らのその身体を以て子供の作り方を知ってもらおうとしよう。

∞
∞
∞
∞
∞

ベッドに腰かけ、足元に少女を座らせて。

「お、おかあさんのおちんちん……すぐはれてるよ。……いたくないの？」

ジャックがまじまじと見つめる視線の先、そこには巨大な雄の象徴が起立していた。

どうやら勃起した陰茎を見るのは初めてらしいジャックは、これが男として正常な反応、正常な形姿である事を知らなかったようだ。少女は食い入るようにそれを見つめている。

「ちなみにジャックは、この後なにをするかは分かるかな？」

「このあと？ ……うん、分かった！ 解体だね♪」

「絶対にやめて！ そんな方法で女主人公になりたくない！！」

さらっと恐ろしい事を言ってくれる。これは自分の息子のためにも、正確な性教育を施してあげる必要があるかもしれない。

47 「なめる？ おちんちんを？ おかあさんをペロペロすればいいの？」

俺が「まず初めに……」と説明すると、ジャックが不思議そうにこちらを見つめてきた。だが戸惑ったのも数秒だ。少女はすぐに俺の指示を理解して、鼻先が触れる程の距離まで自分の顔を肉棒に近付けていく。もう少し恥ずかしがるものと思っていたが、知識が無いかからこそ抵抗感も小さいのだろう、少女は躊躇う事なく舌を突き出した。

その瞬間――

「んちゅっ、えおっ、えうっ、んっ、ちゅう……れるう、んむっ、っあ、んんっ……れろっ、えろっ、んうっ、ぴちゃ、ちゅぷっ、ちゆるっ、んあっ………♡」

「っ……っ！」

マイルームに広がる卑猥な効果音。それに伴って全身を電流のような快樂が駆け抜けた。

「んっ、おかあ、さん……えろっ、じゆる、ちゅぷあっ……これで、いいの？ ……んう」

舌先による愛撫を続けながら、ジャックが不思議そうに首を傾げる。

自分は簡単な「舐める」という指示しかしていない。具体的な舐め方や、どこをどう舐めればいいのかは教えていない。ジャックには自分のやってるそれが本当に合っているのか、不安で仕方がないのだろう。

だが、これをどう表現したものか。

「う、うんっ……すごく上手だよ、ジャック……そのまま続けて……！」

「ほんと？　じゃあもっと頑張っちゃうね！　……はむ、んんっ、れろっ、れるう、んちゅうう……はあ、はあっ……ちゅ、えおっ、ちゆるるっ、べろっ、ん、んちゅう、べろっ、んあ……♡」

俺がそう言うと、ジャックは喜んだように口淫を再開した。

無知な子供とは思えないほどに、少女の舌先は的確かつ淫靡な動きを体现する。充血した亀頭を舌先でちろちろと舐め回し、裏スジを溶けかけたキャンディアイスのようにべろべろと……そんな、子供らしさと卑猥さを混ぜ合わせた舌先の愛撫に、肉棒は更に硬さを

「よし、次はこれを啜えてみようか。ジャックの口には、少し大きいかもしれないけど……」
「啜える……うん、わかった。やってみるっ」

ジャックが天真爛漫に笑ってそう答えた。

次の瞬間、少女は少し硬直したかと思うと……目を閉じ、大きく口を広げ、ドクドクと脈動する肉棒を……一気にその口内へと啜え込んだ。

「あむっ、じゆる、じゅぶ、ずずずっ……ぢゆる、ぢゅぶっ、ずじゅ、ちゅううう……！！
えあっ、おかあさんのこれ、すごく熱い……んむっ、じゅぶっ、じゆるる、んちゅ、ぢゅ、ぢゅぶう……れろお、ん、んんっ、んはあ……お口に、入りきらないよお……♡」

少女による激しい口淫。ジャックのそれは完全に俺の想像を超えていた。

ぴちゅ、ちゅば、じゆるっ。少女が頭を前後に動かすと、唾液が面白いほどに飛び跳ね

る。ただただ激しく、卑猥な口の動き。亀頭をその口に含んだかと思っただのも一瞬、次の瞬間には喉の奥までそれを啞え込み、ジャックは口内全てを使って俺の肉棒を愛撫していた。

「ん、ちゅ、ぺろっ……じゅる、ちゅぶ、ちゅばあ……んん、んぢゅぶ、んふう、んんっ……♡」

無我夢中でフェラチオを続けるジャック。

自分の足元では、未成熟な身体の幼女が美味しそうに陰茎を啞えている。ジャック自身、分からずとも、その行為に淫猥な何かを感じ取っていたのか、徐々に表情が赤くなっていた。

「おかあさん、んっ……おちんちん、びくびくって震えてるよ……？ んちゅ、ぢゅる、んう、あむう、んっ……♡ じゅる、じゅぶ、じゅずるる……♡」

「そ、それは気持ちよくなってる証拠だよ。ジャックがあまりに上手で喜んでいるんだ」

「そう、なんだあ……おちんちん、もっともっと気持ちよくしてあげるね……♡ おかあさんのおちんちん、いっぱいちゅっちゅしてあげる……んちゅ♡」

そう言うと、ジャックは亀頭の先端にキスをした。その小さな唇とキスをしたモノのグロテスクさが矛盾して、背徳感が快楽として駆け巡る。端的に言うのなら、実にエロかった。

「れろっ、ぴちゃ、ちゆるるっ……♡ んふあ、あむう、じゅぶんっ、ずずっ、えろ、ペろっ、ちゅううう……んちゅ、ちゅおあ、ん、んっ、んんっ……んじゅ、ぢゆる、ずじゅ、んはあ……♡」

時に舌先で肉棒を隈なく舐め回し、時に口内全部で愛撫する。

まるで自分の舌を使ってペニスを掃除しているかの如き光景だ。

性知識も乏しいロリサーヴァントにそれをさせているとあっては、征服感が凄まじい。もういつ爆発を迎えてもおかしくはなかった。

「じゆる、ちゅぷ、ぢゅぱっ、んじゅうう……はあ、はあっ……おかあさん、なんだか苦し

そうだよ……？ それに、おちんちんがすごく膨らんで……」

ジャックが心配そうにこちらを見上げる。

男のそれが勃起する事も知らなかった彼女だ。射精という現象も理解していないのだから。おそらくは、肉棒の内側から何かが飛び出てくることすらも。

「心配しないで、ジャック……男の人はね、気持ちよくなるとここから精子を出すんだ」

「せーし？」

「赤ちゃんを作るのに必要な白い液体の事だよ。だから安心して続けて」

「う、うんっ、それじゃあ続けるね♡ じゅぶんっ、ずず、えろ、んぢゅ、ぢゆるるっ……
んちゅ、ちゅぱ、んふう、あむう、んじゆる、じゆるっ、ぢゅずううう……♡」

再度、肉棒を呑み込んだ少女は、更に激しさを増して口淫を始めた。

カリヤサオに自らの舌先を這わせて、ラストスパートを掛け始める。彼女も本能で終わりが近い事を感じ取っているのだろう。少女の喉は今まさに放たれようとしている雄の体液を求め、一心不乱に愛撫する。

そして――

「射精るっ……………!!」

「んっ、んんんんっ――!?!」

瞬間、ジャックの頭を掴み、押し付けるような形でそれは爆発した。欲望が精液となって射精され、少女の口内を白く塗りつぶす。

「んんっ……………♡ んっ、ふう……………んくう、ん、んん……………♡」

ジャックは苦しそうに目をつぶり、ただひたすらに喉を鳴らして耐えていた。喉奥をつんざく濃厚な精液の味。俺が頭を押さえてしまったため、少女はその全てを口で

受け止める事となる。もちろん彼女の狭く小さな口内では収まらず、飽和した精液が次々と漏れ出していった。

「んあ……なに、これえ……おかあさんのおちんちんから、白いのが、いっぱい……」

「それが精子だよ、ジャック。赤ちゃんを作るのに必要な素だ」

俺がそう言うと、ジャックは嬉しそうに目を輝かせた。口から溢れた分の精液を指で掬い取り、クチュクチュと指を舐め回す。精子の味わいを確かめているのだろう。

「んむ、じゆるっ……おかあさんの精子、すごくネバネバしてる……でも、キラいじゃないよ？ この味、癖になっちゃった。もっとちょーだい、おかあさん。さっきのぴゅっぴゅっつてやつ、もう一回わたしたちに見せて♡」

上目でそんな事をお願いしてくるジャック。射精したすぐには無理だと言いつ返そうとしたが、彼女のあまりに卑猥な台詞と行動に、肉棒は元の硬さを取り戻していた。

とはいえ、もう一回同じことをしても意味は無い。勃起した陰茎を見せた。射精の瞬間を見せた。精液の味を教えた。なら、次にするべきは何か。もちろん本番だ。

「お口じゃないの？ わたしたち、なんでもするよ？」

いまだフェラする気で満々だったのだろう、ジャックがきょとんとして自分を見つめてくる。

なのでベッドに手を付き、四つん這いの姿勢でこちらに尻を向けるよう指示を出した。こちらに陰部を差し出す、無防備な姿勢である。

「んっ……すこし恥ずかしいよお……おかあさん、これからどうするの……？」

四つん這いの恰好のまま、ジャックは顔だけをこちらに向けた。

普段から思っていた事だが、ジャックの服装は特にきわどい。全体的に露出度が高く、下着は紐パンのような形状だ。こうしてお尻を突き出されると、もはや全てが丸見えだった。唯一大事な部分を布一枚に隠されているが、それをずらし、亀頭の先端を擦り付ける

と、ジャックが悲鳴らしき声を漏らした。

「お、おかあさん、何してるの……？　そこはおちんちん入れるところじゃないよ……!!？」

自身の雌穴に添えられた肉棒を見て、泣き出しそうなほどにジャックは叫ぶ。

だが、心配はいらない。そう慰めると共に、これからする事の意味を説明した。

曰く、男女はこのようにして愛を紡ぐのだと。女性の膣内に男性器を挿入し、そこで射精を施す事によって愛——すなわち、子供が誕生するのである。

「つまり、おかあさんのおちんちんを、わたしたちのおしっこの穴に入れて……それでさっきの白いのを出したら、赤ちゃんが出来るってこと？」

「正確にはもう一つの穴の方だけだね。そっちの穴はおまんこって言うんだ」

「おま、んこ……？　……うん、ちゃんと覚えたよ。これのことだねっ」

そう言ってジャックが自身のロリスジを広げ、見せつけてきた。

ふっくらと盛り上がった恥丘が左右に開かれると、その内側からピンクの幼膣が現れる。おそらくは先程の口淫で少なからず感じていたのだろう。少女の雌穴は愛液に濡れていた。

「おかあ、さん……わたしたちのおまんこ、変じゃない、かな……？」

変じゃない、そう答えると安堵したようにジャックが胸を下ろした。

誉め言葉としては微妙だが、ジャックの膣口は実にいやらしい形をしている。それ自体が生き物のように発熱し、入口をひくひくと震わせていた。クリトリスも小さく勃起し、幼さといやらしさのギャップがたまらない。

もう我慢は出来なかった。改めて少女の雌穴に亀頭を触れ合わせると、今度こそ挿入の準備が整った。ジャックもその瞬間を静かに待ちわびている。

そして――

「ん、あつ、あ、あうんんっ、んんんんっ……！」

甲高い悲鳴。腰を前に突き出した途端、ジャックの口から嬌声が叫ばれた。

「あ、はっ、んあっ、あっ……！ 激し、すぎる、よお……そんなにされたら、壊れちゃ……んっ、ふうっ、ん、んっ、あ、あっ……♡ おかあさんのおちんちん、わたしたちのおまんこの中で、いっぱい暴れて……んっ、はぁ♡」

肉棒は膣の入口を簡単に突き破り、少女の洞穴を乱暴に掘削する。

幼く閉じ切った膣道を、自らのものの形で強引にこじあける。

そしてすぐさま引き戻し、ペニスの挿入を開始した。

「あっ、んんっ、これえ……びりびり、するよお……♡」

ばん、ばん、ばん。バックから力強く腰を押し付け、そして引く。

肉棒は少女の幼いマンコから蜜液を掻き出し、その奥にある赤ちゃんの小部屋を幾度となくノックした。辛そうな声を上げるジャックだったが、その声は艶めかしい響きを奏でている。快楽に溺れた少女特有の艶やかさだ。

「やっ、そこっ、だめ、だよお……おかあさんの、すごく硬くて、っ、お腹の中、変な感じ……ひゃうっ♡ あっ、あ、はっ、んあっ……すごく、深いところまで、届いちゃってる……んっ、くうっ……♡」

小刻みに痙攣するジャックの雌穴。それは彼女が無意識の内に精を搾り取ろうと考えたが故の反応だったのかもしれない。おかげで肉棒は痛いほどに締め付けられていた。あまりに狭く、それゆえ快樂が凄まじい。このような代物を名器と呼ぶのだろうか。

「おかあさん、おかあさん……わたしたち、変になっちゃったよお……♡ 痛いのに、苦しいの、気持ちよくにやってる……んっ、ん、あっ、こんな感覚、初めてっ……んんっ♡」

肉棒は何度も少女の最奥をつんざき、その度にジャックが艶めかしい喘ぎ声を泣き叫んだ。

快樂に浸る獣としての嬌声……自覚は無いだろうが、ジャックは既に雌として墮ちきっている。

「ん、んああつ、はうん、くつ、あつ、あんつ、はつ、おかあ、さん……♡」

ただ、驚きだったのは……ジャックの方からも快楽を貪ってきた事だった。

自らもまた腰を動かし、ピストンを続ける肉棒をまるで愛撫するように啞えるジャック。初めてとは思えない幼女の腰使いに、自分の方が圧倒されていた。

知識や経験は無い。となれば、これは天性によるものだろう。淫魔の如き素質は、ジャックが生まれながらにして有していたものだ。言うなれば、このロリ膺こそが彼女の宝具である。

「あつ、ああつ、はあつ、んあ……おちんちん、もっとパンパンしてえ……♡ おかあさんがお腹の中に広がって……おまんこ、じゅぼじゅぼされるの、すきい……♡」

攻めていた筈が攻められていた、なんて話は往々に聞く。

何というか“エロい”も彼女を単なるロリサーヴァントと違ってはダメだ。油断すれば一瞬で搾り取られてしまう。ここは一先ず、男としての意地を見せつけよう。

「あひゃっ……お、おかあさんのおちんちん、急に元気になった……♡ あっ、あっ、私たちの中で、いっぱい暴れて……ん、あ、あっ、はっ、んあっ、あっ、んああっ……♡」

挿挿のペースを更に加速させると、ジャックも更に色っぽく悲鳴を上げた。

彼女の小さな体をベッドに押し付け、肉棒をより深くまで到達させる。元より浅い位置に存在した子宮口だ。亀頭の先端は、ジャックの大切な部屋の入口を何度もノックする。

「あっ、んんっ、そこお……コンコンされると、気持ち良くなってえ、ああんっ……♡」

四肢をガクガクと震わせるジャック。

押し寄せる快楽に足腰が砕けつつあるのかもしれない。

「おかあさんっ、なにか変だよお……！ なにか大きいのが来て……こ、怖いよお……！！」

するとジャックは、不安そうな声色で俺に助けを求めてきた。

涙ぐんだ表情には、いまだ経験した事のない絶頂の予感に対する恐怖が浮かんでいる。

「大丈夫だよ、ジャック……!!」

だから、腰を動かしたままそう言った。

「ジャックは消えたりするわけじゃない。何処にも行ったりしないし、俺も一緒についている。だから安心してイッていいよ……!!」

「う、うん……!!　これがイク、ってことなんだね。わたしたち、もうイキそうだよ……!!」

少女の膣がひどく痙攣しているのが分かる。

限界が近い事は明白だ。その前に、最も重要な事を教えておこう。

「ジャック……!!　さっきの白いやつを、このままお前の中に出すぞ……っ!　これで赤ちゃんが出来るんだ、しっかりと受け止める……!!」

抽挿がラストスパートに入り、限界を間近に控えた少女に対しそれを伝えた。

ジャックはどういう事かと不思議そうな瞳を向けている。なに、単純な事だ。陰茎から吐き出される精子を、少女の体内に注ぎ込む——すなわち、膣内射精という行いが、子供が生まれる仕組み、生命の営みの真相なのだ。

「じゃあ、じゃあっ……もしかして、わたしたちの中で、おかあさんが精子をびゅっびゅしたらっ、わたしたちの赤ちゃんが出来るってこと……！！？」

「ああそうだ。お前がお母さんになるんだよ、ジャック……！！」

「うん、うん、うんっ……♡ なるっ、なるよっ♡ おかあさんの精子いっぱい受け止めてっ、おかあさんになる、よお……♡ だから、ぎゅってしてえ♡」

その瞬間、限界は同時に訪れた。

男としての本能か、それともジャックの願いを聞いたからか。快楽が爆発する直前、自

分は少女をベッドに押し倒していた。自らの膂力で完全に組み伏せ、肉棒を奥深くへと突き入れる。その姿勢は間違はなく孕ます事を目的としていた。

ジャックの子供部屋と亀頭の先端がキスをする。逃げられないようにした上での膣内射精。その征服感、背徳感に恐怖し、子種は一斉に放出された。

——ドクンツ、ドピュツ、ドピューツ、ドピュルルルルツ!!!!

「んくう、んんあああああつ——!!! ああ、あつ、はあつ……♡ おかあさんの、おちんちんからあ……精子、どぴゅどぴゅしてえ……♡ お腹、いっぱいだよお……♡」

勢いよく吐き出された精液は、その全てが少女の子宮の中へと注がれていく。それと同時にジャックも絶頂を迎えたようで、身体をびくびくと震わせていた。

数秒程の余韻。やがて身体に自由が戻り、肉棒を膣穴から引き抜くと、ジャックが疲れ切ったようにベッドに倒れ込んだ。性教育という名目の実践授業は、そこで終了した。

∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞

「お風呂、気持ちいいね♪」

「ジャックはお風呂、好き？」

「うん！ おかあさんと一緒に入るのはもっと好き！」

その後、自分とジャックは自室のバスルームで休憩を取っていた。

一人用の狭いユニットバスで二人一緒に湯につかる。ジャックとならそう窮屈にも感じないし、汗を流すにはちょうど良かった。

「えへへっ……赤ちゃん、いつできるかな♪」

お腹をさすさすと撫でるジャック。少女の子宮には、今もなお自分の注ぎ込んだ精液が溜まっている事だろう。ジャックはその感触を嬉しそうに味わっている。

(うーん。サーヴァントは基本的に霊体だし、子供は出来ないんだけど……教えるのも、夢を壊すようで気が引けるしなあ……)

そう、大切な事を言い忘れていた。自分もつい誤解させるような言い方をしてしまったが、サーヴァントが妊娠する事は基本的にあり得ないのである。霊体なので当然と言えば当然だ。それこそ、聖杯の奇跡でも無い限りは……

「ねえ、おかあさん？」

「ん？」

すると、ジャックがもじもじと肩を震わせて。

「またしようね。赤ちゃん、何度でも作る。もっともっと気持ちいい事を教えてね♡」

「ははは……」

果たして、ジャックへの性教育は成功に終わったのだろうか——

俺は、恐ろしい怪物を目覚めさせてしまったのかもしれない。ジャックのあどけない笑顔を見て、つくづくそう思うのだった。

霊基No.03ジャンヌ・ダルク・ オルタ・サンタ・リリィ



PROFILE

身長：141cm 体重：39kg

ジャンヌ・ダルクが黒化し、リリィとなって、サンタを襲名した(?)
よく大人ぶるが、まだまだお子様。

魔力供給回数：123回 絶頂回数：202回
好きな体位：対面座位 処女喪失日：召喚から37日目

妊娠確率：39% 【安全日】

マスターの子どもは欲しいが、大人なのでちゃんと妊娠のリスクについて考えている。だから基本安全日を狙って行すが、子どもなジャンヌは安全日を「絶対安全」だと思い込んでいる様子。

STATUS

絆LV 100 
Next 0

性欲：C	★★★★☆	知力：D	★★★★☆
体力：B	★★★★☆	母性：C	★★★★☆
従順：C	★★★★☆	反抗：B	★★★★☆
淫乱：B	★★★★☆	感度：C	★★★★☆

「ふふふ、私の大人な魅力にコーフィンしてるみたいですね。
隠してもムダです。トナカイさんのことなら
何だってお見通しですから！」

霊基No.03ジャンヌ・ダルク・ オルタ・サンタ・リリィ



SECRET GARDEN EX

SG1：成長願望

サーヴァントにしては珍しい「成長を前提とした」存在。大人な存在に憧れている彼女は、まず真っ先に「マスターに己の処女を捧げる」ことを思いついた。

SG2：職務忠実(サンタ)

サンタの使命に忠実な少女。サンタとはプレゼントを与える存在だが、それはそれとしてプレゼントされるとすきく嬉しい。特にマスターのアレを……。

SG3：聖夜の奇跡

本来はクリスマスを超えられぬ、奇跡のような存在。だがそれを乗り越えた今、彼女にとって聖夜とは文字通り「奇跡の日」となった。(曰く、夏より冬の方が精子の質、卵子の感受性共に良く、祝祭の高揚感、アルコールが入ることによる避妊率の減少など、クリスマスは子供がデキやすいという説を話したらジャンヌはしばらくフリーズした)。

WEAK POINT

breasts：★★★★☆

胸を見せてとお願いしたら恥ずかしがり、触らせてと言ったら迷った末に頷ぎ、ペロペロさせてと言ったら「それはハレニチです！」と怒られた。

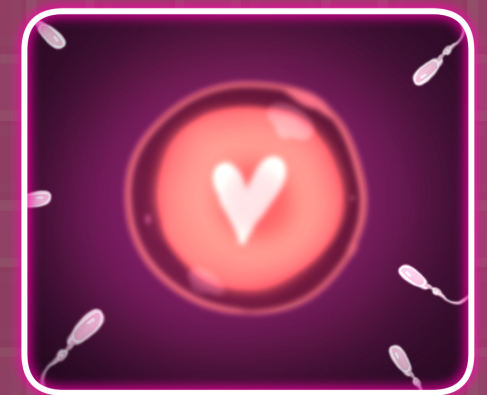
clitoris：★★★☆☆

あまり性知識の無いジャンヌは、初めてその部分を愛撫された衝撃をいまだ忘れられない。今では自室で隠れてクリオナするのが隠れた趣味。

vagina：★★★★☆

うわりの長い、未成熟な膣道。最奥を小突かれるのがとても好きで、何度もそれをリクエストする。与えすぎた快感は、少女の秘めた性欲を解放する結果となり……。

LIVE



状態：♥♥♥

安全日だとすっかり油断している。完全に無防備なので、中出しすると高い確率の判定で妊娠に成功する。

「しゅんしゅんしゅん♪ しゅんしゅんしゅん♪ ふんふんふんふん♪」

廊下を流れる、どこか聞きなれた曲調の鼻歌。それを樂しそうに歌っているのは、白を基調とした服に身を包む小柄な少女だった。

ジャンヌ・ダルク・オルタ・サンタ・リリィ。かのフランス救国の聖女ジャンヌ・ダルクの黒化した姿にして、本来は存在しない幼い頃の姿として召喚されたサーヴァント——まさに聖夜の奇跡と言うべき現界を果たしたその少女は、カルデアの廊下を洋々として歩いていた。

「ええっと、マスターさんのお部屋は……あった！ うう、緊張します……ですが、ここで帰るわけにはいきません！ セっかくサンタとしてマスターさんにプレゼントを持ってきてたんです、ここで退いてはサンタの名が廃ります！」

ふと、樂しそうにしていたジャンヌの歩みが緊張と共に立ち止まる。彼女の目前に立ち塞がるのはある少年マスターの自室、その扉だった。

深呼吸して心を落ち着かせる。生真面目な性格とはいえ、そうでなくとも意識はするも

のだ。それが最愛の主の部屋ともなれば、少女の緊張は当然の反応だと言えた。

後ろ手に「筒状に丸めた一枚の画用紙」を持ち、こんこん、と小さく戸を叩く。勇気を振り絞って、いざその扉をゆっくりと開いていき――。

「や、夜分遅くに失礼しますマスターさん！ 今日にはプレゼントを持ってきました、どうぞ受け取ってください――ってあれ？」

扉を完全に開け、台詞を捲し立てるように述べ終わった所で少女は気が付いた。

音がしないどころか気配すら無い。要するに留守なのだろう。部屋中どこを見渡しても、目的である彼の姿は見当たらなかったのだ。

「まったくもうっ、サンタが来たのに部屋を開けているとは何事ですかっ」

緊張をして損をしたと、ジャンヌは不貞腐れるようにして溜息を吐いた。

カルデア唯一のマスターである彼の多忙さは分かっている。こうして部屋を開ける事もそう珍しくはないだろうが……論理では表せないやるせなさに、少女は不満を呟くばかり

「仕方ありません。マスターさんが帰ってくるまで、この部屋の掃除でもして時間を潰していきましょう。マスターさんのお部屋をキレイにするのもレディでありサンタである私の仕事です。別に褒めてほしいとか頭ナデナデしてほしいとか、そういう事ではありません！」

思い立ったが吉日、ジャンヌはすぐさま行動に移った。

マスターがいつ帰還するかは分からないが、じっと待っていても仕方ない。それよりかは掃除でもしていた方が有用だし効率的だと少女は考える。実に論理的だと自画自賛した。そして――

「む、ベッドの下に本を発見です！ 何かの拍子に落としたのだと考えられますね。拾ってベッドの上に置いてあげましょう。論理的解決です！」

「ゴミ箱に大量のティッシュが！！ ……これはもしかすると、マスターさんは花粉症なのかもしれません。後でお菓を届けてあげましょう。ふふっ、気遣いの出来るサンタが側に

いて、マスターさんは幸せ者ですね♡」

「おや、このアルバムは？ ……こ、これはサーヴァントの写真です！ なるほど……マスターさんは人知れず、カルデアの様子を写真として残していたようですね。それにしても、一つ残らず私たちの目線がそっぽを向いているのが気になります……」

といった感じに、部屋を掃除すること数十分。満足のいったところでジャンヌは手を止め、ベッドに腰を下ろす事で休憩とした。

マスターはまだ来ない。しかし今更帰るわけにもいかず、退屈を持て余した少女はそこで暫しの仮眠を取る事に決めた。ベッドに寝転がり、猫のように丸くなる。暫く休んでいれば今度こそ帰ってくるだろう、と。

「んっ……」

ただ、不思議と寝付きは悪かった。

普段とは違う使い慣れていないベッドだったからか。それが自分にとって大切のマスター

の使っているベッドだったためか。行き場を失った手持無沙汰を、少女はある事あることをして紛らわそうと考える。

指を持っていったのは、小鹿のように細い自分の両脚の付け根、いわゆる股と呼ばれている部分である。ベッドに寝転がったまま、ジャンヌはそこにあるものを下着の上から愛撫する。

(最近発見しました……ここを触るとすごく気持ち良くなるんです……っ)

それはつまり自慰オナニと呼ばれる行為だった。いまだ性知識も乏しいジャンヌにとって、その行為が何であるかは分かっていない。ただ漠然とした「気持ち良い」という事だけを理解している。

最近気付いた事であるが故、もちろん誰にも言っていない。仲アリスやジャックの良い友達もおそらくは知らない、自分だけの発見と少女は信じている。彼女たちよりも大人だからと、少しばかり優越感に浸っていたのも事実だ。

「んんっ……はああっ……あうんん……んっ、ましゆたあ……♡」

ジャンヌはその脳裏にある少年の姿を思い浮かべて、愛撫の動きを加速させる。

どうして彼の姿を浮かべてしまうのかは分からない。

どうして彼の姿が消えないのかはいまだに分からない。

ただ何となくその行為が「イケナイこと」だろう事を少女も感じ取っていた。つまり、ちよつとした背徳感である。分かっていながらに指は動いてしまう。

「あっんうっ……これっ、止まりません……♡」

割れ目に沿って指を奔らせ、敏感なその部分を執拗に撫で回す。

豆のような部分を弄ると更に気持ち良い事をジャンヌは知っていた。

陰裂からは次第に蜜液が滲み出し、黒の下着をじわじわと濡らしていく。背筋をぞくぞくとした感覚が込み上げてきて……少女の自慰はようやくラストパートを迎えた。

「き、来ちゃいます……！ エッチにゃのが大きくなって……んっ、くうんんう……！！」

絶頂。その正体が分からずとも、ジャンヌの身体は間違いなく極みに達していた。

指で愛液を掻き出すように割れ目をなぞり、そこにある突起をクリクリと愛撫する。痺れるような快楽。酩酊するほどの衝撃。それだけで全身は果てしない解放感に包まれた。少女の身体はバネのように跳ね上がり、背中をのけ反った状態で硬直する。

ぷしゅ、ぷしゅ、ぷしゅ。下着の内側で、絶頂による潮吹きが行われた。その間ジャンヌはひたすら「彼」の事を想い続け、ついには収まった時、弛緩しきった身体は力なくベツドの上へと倒れていった。

「はあはあ……また、してしまいました……非論理的です、こんな事……♡」

そうは言うも、ジャンヌの表情は自分では分からないほどに幸せそうだった。

普段の真面目な性格からは想像できない、彼女の隠された一面……本性とでも呼ぶべきか。

「誰にも言えません……アリスやジャックにも……マスターさんにだって」

ある種、自分の身体に異変が起きたのではとジャンヌは疑っていた。しかし相談しようにも相手がいない。いや、そもそも相談するべき内容ではないのかもしれない。

故に、少女もそれを自分だけの秘密とし、誰にも明かせぬ趣味とする事に決めていた。彼女の判断はきつと正しい。公に告白すべきでない事くらい、知識の浅い少女にだって分かる事だった。——まあ、その一部始終を俺に見られていなかったら完璧だったのだが。

「……ほえ？」

「あ」

その瞬間、余韻に浸るジャンヌの虚ろな視線が、部屋の外から覗く何者かのそれと重なった。

暫しの沈黙……理解が追いつかないといった様子で自分を見続ける少女の視線……やがてそれが幻でも夢でもないのだと理解した彼女は、ひどく恥ずかしい思いに襲われるのだった。その後、絶叫が轟いた事は言うまでもない。

∞
∞
∞
∞
∞
∞

「……一体いつから覗いていたんですか」

「わりと最初の方からかな？ 自分の部屋で誰かの声が聞こえてきたから、様子を見ようと静かに扉を開けて……」

「そ、それなら声を掛けてくれても良かったじゃないですか！ 最後まで見ている必要なかったですよ、論理的に！？」

「気持ちよさそうにしていたから……つい」

顔を真っ赤にして怒っているジャンヌ……いや、きっと恥ずかしがっているのだろう。

自業自得（俺の部屋だった）とはいえ、オナニーを誰かに見られた破壊力は凄まじいものがある。まあ、俺も意地悪だった事は認めよう。すぐに声を掛けたり、あるいは見ていなかったフリをしていれば、ジャンヌが恥辱に苦しむ事も無かったかもしれない。

そうしなかった……そう出来なかった事には理由があった。何しろ、次のレイシフトの打ち合わせから戻ってくると、自分の部屋で幼女がオナニーに耽っていたのだ。それも自分の名を呼びながらである。

要するに……俺の部屋でしていたジャンヌが悪い（直球）。

「それは、そうですね——だってここを触ると気持ち良くなって、周りが見えなくなっちゃうんです……あの、マスターさん？ やっぱり私の身体、どこか変になっちゃったんでしょうか？ お股の辺りを弄ると、ふわあって気持ちになっちゃうんです。た、助けてください！」

ふむ、どうやらジャンヌは自分のしている事が何であるかを理解していないようだ。

思えば、彼女の成長した姿であるジャンヌ・ダルク・オルタ……第一特異点で出会った彼女は、青髭の手によって誕生した蜉蝣の如き存在だ。いわば赤子のような存在である。そ

の若い頃の姿ともなれば、性知識に乏しかったとしてもおかしくはない。

なので――

「ジャンヌ……それはおそらく、オナニー、だな」

「!? 知っているのですかマスターさん！」

食い気味な反応を見せたジャンヌ。知識は皆無だったとしても興味は津々らしい。

「ああもちろんだ。オナニー……それは×××で、×××だから、×××な……つまり生物としては寧ろ正常な、誰でも日常的にやってる事だよ。恥ずかしがらなくてもいい」

「そうだったのですか……なるほど、実に論理的な説明です。安心しました！」

俺がそう説明すると、ジャンヌはホッとしたように胸を下ろした。

その通り、決して彼女の身体がおかしくなったのではない。正常だし、日常的な事だ。寧

ろもつとやれ。過ぎた禁欲は身体に悪いとも聞く。大変ごちそうさまでした、ありがとうございます。

「……………」

すると、何やら考え込んだ様子でジャンヌは黙り込んでしまった。

ちらちらと俺を見てくるので、つい「どうしたの？」と声を掛けると、何かを閃いたようにジャンヌは顔を上げた。

「わ、私だけ見られるというのは割に合いません！ マスターさんだけズルいです！ なので私にもマスターさんの恥ずかしい部分を見せてください、論理的に！」

「えっ、いやそれは——」

「問答無用です！ はい論破あつ——！」

「なんでさ——!!」

論破（物理）。

ジャンヌにドンッと突き飛ばされ、ベッドに身体を押し倒されてしまう。

体勢を立て直す間もなくジャンヌは俺に跨って……その時には既に、自分の目の前には少女の小振りなお尻が現れていた。

「……あのー、ジャンヌさん。これは一体……」

「実にロジカル、実にサンタ的発想です。私だって恥ずかしい思いをしたんですから、マスターさんだって恥ずかしい思いをしてくれないと不公平です！」

「だからってこんな格好で……」

「サンタがトナカイさんに乗る事のどこに不自然なところが？ いい加減に観念してください。マスターさんはそこでじっとしていてください！ それでは行きますよ……!!」

そう言って、俺に尻を向けた体勢のまま、ジャンヌの視線はある部分へと伸びていった。ただたどしい指使いでズボンのチャックを下ろし、そこに収められていたものを取り出すと、彼女の相模がたちまち恐怖と驚愕の色へと変化する。

「びゃっ!?!? なななんですか、この大きいモノは……!?!? 私の知ってるものと全然違います! こ、これが本当にマスターさんのおちんちんなのですか……!?!?」

飛び出した肉棒の形姿、そして圧力に、ジャンヌは目を見開いて驚愕した。

少女の目前では硬く怒張した陰茎が荒々しい熱気を放っている。正直に言えば、彼女の自慰を覗き見していた時からそれは勃起しっぱなしだったのだ。

見るもグロテスクな異形を前にして、恐怖にも似た感想を漏らすジャンヌ。だがまあ、こうなってしまうのは仕方ない。少女に己の息子を見られ、可愛らしいお尻を向けられては、据え膳を喰わぬというのも無理な相談だった。なので――

「こっつこれを舐めるんですか!?!?」

うむ、そういう事だ。

まさか見て終わりだなんて、そんな甘い話があるだろうか。いや、ない。

それともジャンヌには難しかったかな？ だったら俺も無理は言うまい。誰にでも相応の世界があるのだし、ジャンヌに大人の世界は早かったという事だ。

「ぐぬぬ……ば、馬鹿にしないでください！ 私は一人前のレディーです！ マスターさんの……お、おちんちんだって簡単にペロペロできちゃうんですから！」

ちよろい（確信）。ムキになって対抗心を燃やすあたり、ジャンヌはまだまだ子供だなあと思う今日この頃。後悔しているのか、少女は苦しそうな視線を肉棒に向けて、

「で、できます……私が大人だってところを、証明してみせます！ んっ……ちゅ♡」

淡い吐息がペニスを撫でる。少女の唇がゆっくりと近付いていき……意を決したように喉を鳴らしたジャンヌは、そのまま亀頭の先端に優しくキスをした。

「ん、むうっ……れおっんちゅ、ちゅぼっ……ちゆるる……♡ んあっ……マ、マスターひゃん……これで、いいですか……？ なんだかイケナイことをしてる感じで……ド、ドキドキします……んっ！」

たどたどしい舌使い。幼女には些か大きすぎる程のイチモツを、ジャンヌの舌尖が慎重かつ大胆に舐め回していった。初めて見る勃起した陰茎を両手で丁寧に握りしめ、少女はいやらしくも肉棒への口づけを繰り返す。

しかし、やはり苦しそうに見えるのが本音だ。思わず「もうやめる？」とギブアップを勧告したが、それが尚更に少女の闘志を燃やしたのか、ジャンヌの口淫が余計に加速する。

「私、子供じゃありません！ マスターしゃんと、大人なことだって、んっ……ちゃんと、出来るんです……♡ ちゅぶ、んっんん、んはあ……だから、続けさせてくださいひゃいマスターさん……♡」

少し甘く見ていたのだろうか。性知識に疎いジャンヌだったが、性に対する熱意だけは本物だ。肉棒を満遍なく舐め回す少女は、この上なく淫らな様子で、“大人”を感じさせた。ならばもう少し先へ進んでもいいだろう。無知なロリサーヴァントを教育するのもマスターの務め。ジャンヌを淫乱少女に育てるのも悪くない。

「くわえる……これを、くわえればいいんですね……？」

俺からの指示に、ジャンヌは従順にも頷いた。

「マスターさんは非論理的な事ばかりを命じてきますが……これもサーヴァントの使命！ 私のお口でよければ、全力で気持ち良くしてみせます……！！」

そう言うと、ジャンヌはその小さな口内で肉棒を一気に咥え込んでいった。

途端、生温い心地よさが亀頭の辺りを満たす。少女の口内では先っぽを含むだけで限界だろうが、唾液に満たされたその世界はそれだけでも十分なほどに気持ち良かった。

「んじゅるる、じゅぶう、じゅぼおっ……♡ んむう……マスターひゃんの、大きくて……ん、じゅるぢゅぷっんじゅう……お口に入りきりません……それに、おちんちんの先っぽから透明な液が出てきて……んちゅっ、ちゅる、じゅるうんんぐっ、んむっ……少し、しょっぱいですね……♡」

無知な幼女とは思えないほどに卑猥な口淫に、全身を痺れるような快楽に襲われた。

甲斐甲斐しくもフェラを続けるジャンヌ。自分の大きすぎるものをロリサーヴァントに啜えさせているこの状況はたまらなく刺激的だ。先走って亀頭が液を漏らしたが、それをジャンヌは恐れることなく吸引する。

「んむうじゅるるんぢゅ、れろっ……あむっ、んぐ……じゅぶ、ずじゅ、ぢゅるる……♡」

ジャンヌの口淫はますます激しさを増す一方だった。性に貪欲というか、生来の気質としてジャンヌには淫乱の素質があったのかもしれない。

幼女に自分のものを舐めさせているだけの状況も悪くないが……せっかく自分の目の前には彼女の秘部が置かれているのだ、こちらも責めさせてもらおうとしよう。

「んむっ、んんうううう……っっっ！ んひゃっ、マ、マスターしゃん！ そんなところ舐めるなんて、んひっ、汚いですよお……♡」

鼻先数センチの距離にある幼女の陰裂。黒い下着を横にずらすと、ジャンヌの割れ目が愛液を垂らしている事が見て取れた。躊躇いもなくそこに口づけすると、少女が恥辱に震えた悲鳴を泣き叫ぶ。

「ふう、んあぁっ、はぁんあっ——♡ マスターさんに舐められると、自分で触るよりも気持ち良くなって……んっひいうんっ、あっあん、なんだか変にい……んんっ♡」

それがまさしく禁断ロリのあかしの園である事を告げるように、ジャンヌの陰部はピチツと固く閉ざされていた。自慰によって既に絶頂を迎えてもいるため、少女のロリスジは洪水とばかりに濡れている。音を立てて愛液を啜ると、やはりジャンヌは悲鳴をあげるのだった。

「はぁんっ、だっ、汚いですよお……♡ まずはあひゃんに、じゅるじゅるされると、

おしっこみたいなのが、止まらなくてえ……んふあああっ♡」

そんな事は無いと安心させるように、一際強く蜜液を吸引する。それに汚いというのなら、俺のペニスをしゃぶっている彼女もまた同様の感想を抱くべきだ。つまりはお互い様、恥ずかしがる必要なんてどこにもない。

「そ、そうでした……ますたーさんのおちんちん、ちゃんとじゅぼじゅぼしてあげませんと……んっんっ、じゆるっんぢゅう、んむう……ずるるう、んぐ、んう……♡」

クンニの衝撃に動きが止まっていたジャンヌは、己が使命を思い出したとばかりにフェラチオを再開させた。いわゆるシックスナインの体勢のおかげで、二人同時に口淫を続けられている。ジャンヌは俺の肉棒を、俺はジャンヌのロリ膣を。美味しそうに互いの体液を啜ることで、絶頂の瞬間が少しずつ近づいていた。

「はあんっ、ひあっ、あむう……んじゅ、んぢゅうんずずっ……ふはあっ、ますたあさんのおちんちん、びくびく震えています……♡ それに私も、気持ち良いのが来て……っ！」

オナニーで迎える絶頂とはまた違った快樂、ジャンヌを襲っているのは彼女が経験した事のない部類の衝撃だ。他人にイカされるといふ感覚を、この際、味わうといい。

「ひゃっ、あっああっ、んああっああっ……♡ イッ、イキます、イッちやいます……ますたあしちゃんにお股を舐められて、んっんんむう、んじゆる、じゆるっ、ずじゅ、ぢゆるるう、んじゅうううう……!!」

最後の瞬間、一段と強くペニスを口淫したのには、ジャンヌなりのプライドがあったのかしれない。膣穴を舌で愛撫され意識も虚ろだったろうに、俺にもイってもらわねば気が済まなかったのだろう。

亀頭を強く吸い上げる幼女のフェラに、限界は加速してやってきた。ちょうど少女の方も爆発を迎えるらしく、トドメとばかりに膣穴に舌を潜り込ませた瞬間。

「射精るっ……!!」

「んむぐっ！… んん、んんんっ——♡ んふう、んむっ……じゅるる……んぐっ、ごくん……ぷふあ、ますたあひゃんのおちんちんからあ……白いのが、ぴゅっぴゅって……！」

絶頂は同時に訪れた。肉棒はジャンヌの口内に包まれた中で爆発を遂げ、少女の割れ目はぷしゃあつとスプレーのように愛液を噴射する。恍惚とした味わいにビクビクと身体を震わせたジャンヌは、それでも陰茎を啜え損なうことはなく……射精が終わるまで、その喉奥で男の子種を受け止めていた。

「ん、んう……けほっ、けほ！… すごく、苦いです……白くて、ドロドロしてて……あ、あの、ますたーひゃん？ これは一体なんなんですか……？」

口内全体を白く濡らし、ジャンヌは不思議そうに俺を見つめてくる。大部分は飲み干したとはいえ、いまだ彼女の口内には俺が吐き出した精液が多く残っていた。そうやって口の中の精液を見せつけてくるジャンヌには、説明できない淫靡な感情を覚えてしまう。

「これが精液……赤ちゃんの、素、なんですな……！」

簡単な説明を施すと、ジャンヌは愛おし気な瞳で精液そを見つめた。そのまま指にこべり付いた白濁液を舐め、少女はくちゆくちゆく音を鳴らし咀嚼する。果たして俺の説明でどこまで理解したかは不明だが、最低限の知識は得られたと見える。

さて、これで気も済んだだろう。オナニーを盗み見てしまった事への贖罪も済んだはずだ。

満足したのなら、一先ず服を着て――

「んえ？　にやにを言ってるのですか、マスターさん？　まだ大事なことが残っているじゃないですか、忘れたとは言わせませんよ」

と思っていたのも束の間、ジャンヌは物足りないと言うように視線を向けてきた。

「私の身体、変になっちゃったんです。いつもはあのビリビリって感覚が来ると、疲れたように眠っちゃうんですが……いま、すぐくもどかしくて……！　おっぱいの先っぽやここが、まだまだ弄ってほしいと泣いてるんですっ……！！」

そう言うジャンヌの表情は、幼女らしからぬ卑猥さに濡れていた。

ベッドに座り込んでいた俺の目の前で、少女は慰めるような愛撫を開始する。

服をたくし上げ、現れた桜色の突起を指で摘まみ、もう片方の手で陰裂をぐじゅぐじゅ掻き回す……そんな不満を告げるようなオナニーだ。少女とその雌穴は、そこにあるものを注ぎ込んでほしいと切に訴えていた。

「それに……」

「っ———！」

途端、ジャンヌが身体を屈めて、俺の肉棒に再度キスを迫ってくる。

萎えていた陰茎から精液を吸い出し、挑発的な表情で見上げてくるのだった。

「マスターさんのおちんちんも、まだ足りないって言ってますよ？ 我慢はよくありません。まだまだぴゅっぴゅっしたいって叫んでます。……ふふっ、論破ですね♡」

にっこりと微笑むジャンヌの笑顔に、身体は魅了されたように動けずにいた。

どうやら自分は見誤っていたようだ。ジャンヌは育てるまでもなく淫乱幼女として覚醒しつつある。ともすれば、喰われるのは自分の方かもしれないほどに――

∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞

「それじゃあ行くよ」

「は、はい！ ええっと……ここでさっき教えてもらった台詞を言うんですね？ んっ……

『来てくださいマスター。私のいやらしいロリおまんこを、あなたのおっきなおちんちんでハメハメしてください』……って何を言わせてるんですか、もうっ！」

などと言いつつも要求通りの台詞を言ってくれる辺り、ジャンヌは本当にエロかわいい。

台詞だけでなく、今の彼女の恰好も恐ろしいほどに破壊的だ。

「……じろじろと見ちゃダメです。すごく恥ずかしいです……」

ジャンヌの体勢、果たしてそれを何と形容するべきか。服従する犬のポーズと呼ぶのが一番近いのかもしれない。何しろ少女はいま己の両脚を持ち上げ、自身の秘部をさらけ出す形でベッドに寝そべっていたのだ。

そのせいで、今や全てが露わとなっていた。幼いロリスジはもちろん、少女の可愛らしい菊門も同様に。先程の台詞も相まって、理性では御しきれないほどに自分は昂っていた。そして――

「っ……力、抜いてジャンヌ……!!」

「はいっ……きき、てくだひゃい……そのまま、私の奥へ――ん、ふあああっ……!!」

上から下へと突き刺すような挿入。腰を強く押し出すと、亀頭は少女の硬く閉じられて

いた雌穴を一息に穿通した。肉の千切れるような嫌な音が鳴る。それはきつと、単純なサイズの問題だけではないのだろうか。

大丈夫？ —— 不安がってそう尋ねると、目元に涙を浮かべてジャンヌは頷いた。相当無理をしている事が分かってしまう。落ち着かせるため、そして罪滅ぼしとばかりにキスを交わすと、ジャンヌの様子が少し和らいでいくのが分かった。

「あむ、んっちゅうじゆるっ……んむ、んちゅ、ぢゆるる、んんう……♡ えへへっ、マスターさんとキスしちゃいました……好きです、大しゅきです……もっといっばいちゅーしてください……♡」

キスをするたび、ジャンヌの表情から苦痛が消えていくのが見て取れる。

そろそろいいだろう、と。少女の瞳を見つめて尋ね、それにジャンヌが静かに頷いた。緊張半分、恐怖半分と言ったところか。己の膣内に収まった肉棒を、ジャンヌはまじまじと見つめていた。

「う、動いても大丈夫ですよ……？ その方が、気持ち良い……んですよね？」

その通りだ。ジャンヌには悪いが、このままなのは俺も少し辛い。

「だったら、いっぱいおちんちんしてください……♡ 私のエッチな子供おまんこで、好き
なだけ気持ち良くなっちゃってください……♡ んっ、くうう——！！」

幼女の口から吐き出される卑猥な台詞^{おねがい}。それに我慢ならず、肉棒は膣内の蹂躪を開始した。途端、ジャンヌが甘くとろけた鳴き声を叫び始め、

「あうん、ひゃあ、あっあんっこれっ、しゅごいいい……！ マスターひゃんのおちんちんがあ、私の膣^な内で激ひく暴れ出してえ……んああんっ、んっふうんう、ふあっ、あっあ、おにゃかのなか、しゅごく熱いですっ……ひいうっ♡」

己の体内を乱暴にかき乱す男の存在に、ジャンヌは呂律も回らぬ様子で喘いでいた。

少女にとっては初体験となる肉棒の挿入。膣ヒダを擦り、内部を強引にこじ開けるその感覚は、説明のできない衝撃として少女の理解を超えただろう。

きつく閉じ切った彼女の膣内は、それが不可侵であった事を証明する。しかし、奥を突けば突くほどにそれは徐々に男の形として広がっていき、肉棒の抽挿をよりスムーズにさせた。

「あっひゃっ、んっ、んんっ、これ気持ち良い、ですっ………♡　ますたーさんのカタチが分かって、すごくエッチな気持ちになっちゃいますっ………んっあう、んあっ、あっ、ああんっ♡」

セックスを始めたばかりだというのに、ジャンヌは深くハマっている様子だった。

その小さい身体の何処にそんなエロさが詰まっているというのか。幼い穴ひとつで快楽を貪る少女の姿は、年齢に似合わぬ艶めかしさを感じさせる。エッチに貪欲な少女だとは思っていたが、それでも程度があるだろう。

なので、わざとらしく意地悪なセリフを告げてみる。

「ジャンヌはエッチなサーヴァントだな………！　子供のくせに………そんなにセックス大好きだと、この先がすごく心配だっ………！」

「だ、だって、ますたーしゃんのこと考えると、おまんこがきゅんきゅんしちゃうんです……♡ マスターさんともっとセックスしたいって、騒いじゃうんです……♡ え、エッチにやサーヴァントでごめんなさいっ……嫌いにならないでください……ひゃああっ!!」

その台詞と表情は流石に卑怯だった。泣きそうな顔で懇願するジャンヌは、もはや可愛いかそんな言葉で表せるレベルにはない。もちろん、嫌いになるわけがなかった。

「えへへ……じゃあもっともっと、エッチなこと好きになっちゃいますね♡ マスターさんのことも、いっぱい気持ち良くしてあげます……♡」

そう言うと、ジャンヌはしがみ付くようにして俺に抱き着いてきた。四肢を俺の背中で交差させ、深い位置での交わりを求めだす。

俺自身も腰を強く早く打ち出し、少女の最奥を幾度となく突き刺していた。ジャンヌのロリ膣はすっかり俺専用のカタチに広がり、涎を垂らして肉棒を啜え込む。

「はあ、ああっ、んひっあうんんっ……ますたあしゃんのおちんちん、深いところ叩いちちゃってますっ……♡ あっ♡ あっ♡ これしゅごいですっ♡ しゅごく好きですっ♡」

子宮口を叩くその感覚に、ジャンヌの嬌声は激しくなる一方だった。

攻め方を変え、最奥ではなく天井部を突いてみる。つまりは少女の下腹部の辺りを内側からノックするという事だ。元より体格も小さく、セックスなんて到底できない見た目のジャンヌのお腹は、そうするだけでハッキリとした膨らみを見せるようになった。

そのお腹の膨らみは、ちよつとした妊娠のように見えなくもない。錯覚とはいえ、背徳感が凄かった。こんな幼女を孕ませてしまったと想像するだけで、興奮は更に加速していく。

「あっそこっ、ダメですっ、そこ気持ち良くて、すぐイッちゃいます……♡」

どうやらジャンヌの弱点はお腹の内側のようなだった。だらしのなかった表情が更にだらしなく卑猥さを増す。瞳にはさながらハートマークが浮かび、飽和した快樂の前に焦点が合わなくなっていた。

もうすぐイキそうなのだろう。それはアへ顔をさらすジャンヌの様子を見れば一目瞭然

だ。

「ますたーさん、ますたーひゃん♡　ちゅーしてくらひゃい、キスしてください♡」

子供のように求めだすジャンヌ。舌を出し、口づけを願う姿は外見通りに愛らしい。

「んちゅ、うう……んむ、んじゅぢゆる、ぢゅりゅ、んじゅ、んうんんっ……♡　んはあ……
もうイッチャいます、気持ち良いところ全部こすられて、イッチャいますっ……♡」

幼い身体に過ぎた快楽を与えてしまったのか、ジャンヌの全身は大きな爆発を迎えようとしていた。もうこれ以上は我慢できないと、少女は必死にお願いをする。

「マスターさんも一緒に……一緒に、イッてくださいっ♡　私のおまんこの中で、いっぱい
射精してくださいっ♡　あっ、ああっ……！！」

そのおねだりは凶悪にすぎた。ぞくぞくとした感覚に、限界が段階を超えて訪れる。少

女の膣内を貫く肉棒。込み上げる衝動は一斉に解き放たれて、

「ジャンヌ、膣内^{なか}で出すぞ……！ 俺からのクリスマスプレゼントだ……！」

「は、はいっ！ 来てください、ましゆたあさん！！ 私の中で、ますたあの精液びゆるびゆるって、いっばいらしてくださいっ、んっ、あああああっっ……♡」

甲高い嬌声が部屋を鳴り響く。ジャンヌが一段と強く抱き着いてきた瞬間、肉棒は我慢の限界を遂げ、少女の一番深いところ——子宮の中に、熱く煮えたぎった精液が一気に注がれた。

「あああっ、はあっ、んあっ、あああああっ——！！」

少女の子供部屋では到底収まりきれないだろう量の精液が放たれる。

本来であれば溢れて当然のそれを膣内ですっかり塞ぎ留め、白濁液を出し終える最後の瞬間まで自分とジャンヌは片時も離れずにいた。

∞
∞
∞
∞
∞
∞

——事後。

「そう言えば、ジャンヌはどうして俺の部屋に？ なにか用事だった？」

ふとそんな疑問を呟いた。当然と言えば当然の、少女がここに居た理由である。

「！ 思い出しました、今日はマスターさんにプレゼントを持ってきたんです！ でも留守だったので、時間を潰していて、それで……」

「……それでオナニーしちゃったの？」

「う……た、確かにその通りですけど！　そういう事じゃなくて……！」

はい、と。照れを隠すような強引さで、ジャンヌは「それ」を差し出してきた。

確か彼女はプレゼントと言ったか。つまりは「それ」がそうなのだろう。差し出された一枚の画用紙を開いてみると、そこには誰かの似顔絵らしきものが描かれていた。

これは……いったい——？

「マ・ス・タ・ー・さ・ん・の・似・顔・絵・です。アリスやジャックと一緒にお絵かきをして……う、上手く描けたと思うので、マスターさんに……貰って……欲しくて……あう」

語尾が消えかねないほど自信なさげに呟いたジャンヌ。

よく見ると——いや、よく見なくとも、描かれた人物が誰であるかは容易に理解された。クレヨン仕立てで表現された似顔絵は、平凡な自分の特徴をよく表しているようにも思われる。

「……これを俺に？」

「き、気遣いは無用です！ 迷惑なら迷惑だったとハッキリ仰ってください！」

とんでもない。迷惑なわけがあるものか。ジャンヌが俺を思い浮かべて仕上げ、わざわざプレゼントしてくれた代物だ。要らないだなどと、口が裂けても言えるものか。

それは、いわゆるところの芸術作品とは異なっている。まさしく「子供の作品」と呼ぶに相応しい出来上がりだ。それ故、非常に嬉しい思いがあった。

（自分の娘に似顔絵を描いてもらった父親の気持ちって、こんな感じなのかな……）

微笑ましい気分に含まれ、お礼とばかりにジャンヌの頭を撫でてあげる。

プレゼントを喜んでもらえたのが相当嬉しかったのか、ジャンヌは幸せそうに笑っていた。

「あーもうっ、ジャンヌは本当に可愛いなあ！」

「わわっ、マスターさん！？　もう夜遅いですし、自分のお部屋に帰らないと……ひゃう」

ジャンヌがビックリしたような悲鳴をあげる。

俺に押し倒され、首筋を舐められたのだ。これからどうなるかは彼女が一番よく知っているだろう。

「あの……もう一回だけですよ？　私のお腹、マスターさんの精液でパンパンになっちゃってるんですから。これ以上出されたら破裂しちやいます」

観念したように、ジャンヌは溜息を吐く。

結局……少女が解放されたのは、翌日の朝になってからだった。

霊基No.04 エレナ ・ブラヴァツキー



PROFILE

身長：145cm 体重：38kg

好奇心旺盛で面倒見の良い少女。
どんな(エッチな)お願いも「よくなってよ!」と快諾してくれるらしい。

魔力供給回数：188回 絶頂回数：203回
好きな体位：騎乗位 処女喪失日：召喚から14日目

妊娠確率：77% 【危険日】

つつい甘やかしてしまうので、ダメだと分かっているけども
断れずに膣内射精を許してしまう。ただ最近はその背徳感を楽しんでいる様子も……

STATUS

絆LV 100  Next 

性欲：D++	☆☆☆☆☆	知力：A+	☆☆☆☆☆
体力：C	☆☆☆☆☆	母性：A+++	☆☆☆☆☆
従順：A	☆☆☆☆☆	反抗：D	☆☆☆☆☆
淫乱：D	☆☆☆☆☆	感度：C	☆☆☆☆☆

「また我慢できなくなったのね。ふふふ、よくなってよ。
このあたしに全部任せなさい♡」

霊基No.04 エレナ ・ブラヴァツキー



SECRET GARDEN EX

SG 1 : 母性本能

真名をして、生涯を通し・培った知識、人格を併せ持った謎多き少女。そのママ度は凄まじく、本人も甘えられることに満更でもないらしい。「手のかかる子ほど可愛いのよね……」

SG 2 : 幼児退行

生前のトラウマ。ストレスが溜まると発動する。こうなると大変。「よくってよ」が「してくれなきゃやダあ……！」に変わるといふ。

SG 3 : 拘束趣味

あることがキッカケで芽生えた少女の秘密。「縛られる」ことにちょっとした興奮と安心感を覚えるように。

WEAK POINT

nipple : ★★★★★☆

先端がとても弱い。指先で弄るのは勿論、舐めたり・吸ったりされることも効果靚面。すればするほどツンと尖っていく。

ear : ★★★★★★

耳元にふーっと息を掛けられると可愛らしい声を漏らす。やりすぎると流石に怒る。一方、エレナがしてくれる耳掃除は言葉にできないほど気持ち良い。

vagina : ★★★★★★

全てを受け止める彼女らしく、広く柔らかなその中は包容力が凄まじい。優しく撫でてくれる膣ヒダの動きは、いとも容易く射精感を引き出す。

LIVE



状態 : ♥♥♥

着床の瞬間を待っている状態。神秘を用いれば卵子にプロテクトを掛けることもできるエレナだが、現在彼女はそれをしていない。

——いつか、あるサーヴァントの自室。

この世界には子供のサーヴァントしか存在しない。自分が来るよりも前から存在したダヴィンチちゃんや、デミ・サーヴァントのマッシュは例外で、召喚に成功したのはアリスやジャックといった幼い女の子たち……いわゆるロリサーヴァントしか来てくれないのである。

つまり圧倒的に母性が足りていなかった。食堂で出されるカレーは軒並み甘口、洗濯される下着は悉くが子供パンツ、ブラジャーなんて高尚なもの無く、サーヴァントたちの私服は全てがS（小学生）サイズという……ここはいつから保育施設となったのか。

「よしよし……」

ただ、そんなカルデアにも「おかん」はいる。

今まさに自分の頭を撫でている彼女が、このカルデア唯一の「おかん^{ママ}」なのだ。

「まったく……いつになっても世話の焼ける弟子^{マスター}ね。召喚が爆死^{しっばい}に終わったからって、そこまで落ち込まなくてもいいでしょう？」

「だってえ……」

「もう、情けない声だしちゃって……仕方ない、今回だけは甘えさせてあげる。このキャスターたる私の胸の中で、存分に吐き出しなさい」

エレナ・ブラヴァツキー。キャスターのサーヴァントである少女はにっこりと笑う。

瑞々しい肌。輝く瞳。淡い唇。紫に染めた髪。四肢は短く、肉付きも発達途上。そんな、何処をどう見ても子供にしか見えない少女だった。眼差しは長い年月を経てきた賢者のようではあるけれど、多分にあどけなさを残した目鼻立ちには「少女」と形容して構うまい。

エレナは胸に顔を埋める自分に呆れた風に溜息を零す。けれど嫌な顔はせず、微笑ましいものを見る目つきで俺の頭を撫でていた。「今回だけは」と彼女は言ったが、こういうこと

は珍しくもない。今までにも何度か経験した事がある。

「そんなにサーヴァント事情が不安？ 戦力的には申し分ないと思うけど？」

子を慰める母のような口調でエレナは言う。

召喚失敗に落ち込む自分を、その抱擁的な態度で慰めてくれていた。

「ほらほら、元気出しなさいな。そうやってすぐに甘えたがるのは悪い癖よ？」

頭を撫でる優しい手つき。少女はやれやれと言った具合に嘆息をする。

きっかけは、いつかのサーヴァント召喚だった。それが失敗に終わり、後悔と喪失感に落ち込んでいたところをエレナに見つかって、あれよあれよと愚痴に付き合ってもらったのが事の始まり。

いつの間にか、辛い事があれば彼女に慰めてもらおうという流れが出来あがっていた。エレナ自身も慣れたものなのか、嫌な顔一つ見せずに付き合ってくれる。なので、自分もついついエレナには本音を話してしまうのだ。

「でも、これってどうなの？ 私は別に気にしてないけど……ほら、こうやって慕われるのは嬉しいし、悪い気はしないわ。けど自分より小さい女性に甘えるのって、どうなのかしら？」

エレナがもつともらしい違和感を呟く。が、それは仕方のない事なのだ。

カルデアには子供のサーヴァントしか存在しない。ジャンヌやスカサハ、頼光たちがいれば話は別だが、召喚されていない以上、最も淑女らしいエレナに甘えてしまうのは当然の結果だと言える。

——マシユ？ ……マシユは何ていうか、後輩粹なので例外だ。

うまく言えないけど、「手を出してはいけない」……何故だかそんな感じがする。

「（そっちの方が十分健全な気もするけど……）まあいいわ。貴方ってミスタ・エジソンみたいでつついっつい世話を焼いちゃうし、これでも私、中身はおばあちゃんなわけだしね」

「おばあちゃん？」

「そ、本当はね。生涯をこの姿でいられたのはマハトマのお陰ってわけ。ふふふ、御覧なさいなマスター。レムリア風に決めてみたこの姿。似合ってる？」

自信満々に鼻を鳴らしたエレナ。彼女の言う「マハトマ」なる高次元の存在には未だ不明な部分も多いが、それでも、彼女に関して確かな事がある。

リボンとフリルを拵えた可憐な衣装。健康的な肌色。丈の短いスカートから覗く華奢な肢体は、艶めかしくも輝いている。彼女が伸びをすれば真っ白な両脇が露わとなり、その見た目は完全に十代前半の少女であった。

つまり最高に可愛いし、美しい。とても似合っている。エレナからの「この姿をどう思うか」という質問に対しては、そう正直に答える以外に感想は浮かばなかった。

「ふ、ふうん……貴方ってば随分と口が達者なのね。お世辞を並べても何も出なくってよ？」

そう言うエレナだったが、どこか表情は嬉しそうに。自分としても、頬を赤らめたその笑顔が綺麗だったので……つい恥ずかしくなって、目を逸らしてしまう。

しかしその様子を見られていたのか、エレナがふふっと小さく笑みを漏らした。その笑顔は子供を温かく見守る淑女とした表情であり、あるいは、悪戯っぽく笑う見た目通りの少女のようだったとも――

「……それじゃ始めましょ」

そして。

かくも艶然として無垢な笑顔を見せた少女は、落ち着きを払ってそう言った。ベッドに腰かけていたのを立ち上がり、ぱんぱんっと簡単に身体を叩く。仕草一つとっても美しく、しばし魅了されていたところをハッと意識を取り戻した。

それじゃあ、という単純な一言。その後に来る「何を」始めるのかという疑問に対し、自分は答える術を持っている。こういうことは珍しくないとやった。過去にも何度か経験したと言った。緊張した視線を少女に向ける。すると――やはり少女は、お決まりの台詞でこう言うのだった。

「――よくってよ、何でもしてあげる。このキャスターに任せなさい♡」

∞
∞
∞
∞
∞
∞

もう既に何度と経験した事だろうか。エレナと初めて男女の関係になって以来、彼女の部屋を訪れる事はすなわち、情事の始まりを意味するようになっていた。

「あつ、んんっふう、んっくうっ……♡ こ、こらあ……なんで、そこばかり……んあ♡」

背後から抱きしめる形でエレナの胸を愛撫する。些細な膨らみや、可愛らしく起立した乳首を弄ると、二人しかない室内を少女の嬌声が反響した。

「エレナの乳首、硬くなってるよ……」

「言わなくて、いいからっ……んんっ♡ はあんあ……あつ、やつ、らめっ……♡」

苦しそうにエレナが身を震わせる。

服を腰まで下げた結果、現れたのは彼女の小さな胸の盛り上がりだ。雪のように白く、そして柔らかい少女の膨らみ。それを掌で揉み回し、先端にある桜色の突起を指で摘まみ捻ると、エレナの身体はびくんびくんと痙攣を繰り返していた。

「も、もうっ……乳首ばかり、くりくりしてえっ……♡ はあんんっ、はっ、あっ……ん、んっはっ……本当に、そこが好きなん、だからぁ……んくうっ♡」

背後から腕を回している体勢のため、エレナの表情は見えるわけではない。

だが瞳をとろけさせて、涎を垂らしている……そんな彼女の表情は容易に想像ができた。まるで文句を告げるエレナの口ぶりだったが、抵抗する様子は見られない。俺に身体を預け、おっぱいを弄られる心地に溺れている様子だった。

「んっふう……あっ、あん、先っぽ、気持ちよくなっ……んあっ、ああ、ああっ♡」

少しばかり硬さを孕んだ乳頭。それを指で摘まんだり、引っ張ったり、押し潰したり、あるいは、餅を捏ねるような手つきで胸全体を刺激する。

もつとも。それはあくまで胸だけの快感だった。もつと言えば自分が動かしているのは右手だけ。ここに左手が加わる事の意味をエレナ自身も知らぬわけではあるまい。

「にゃあっ、そっちはっ……♡」

エレナは急に悲鳴じみた叫びを鳴いた。胸の愛撫を続ける右手とは別に、自身の陰部へと迫っていく左手の存在を確認して、不意に恐怖が湧いたのだろう。

「くっ、ううううっ……！ あっん、んっ、はっはあっ……くっふう、ひゃあ、んん、はあ
んっ、だ、だめっ——……んんう、ああっ♡ くちゅくちゅ、しちゃあ……♡」

左手の指はエレナの下着をずらし、その奥に広がる少女の蜜壺を発見した。

楽器を奏でるような繊細さで以て彼女の雌穴に指を挿入していく。ぐちゅぐちゅと音を鳴らす水に濡れた少女の花園。それだけで彼女が感じている事を分かっってしまう。

「……もうこんなに湿ってるね」

「こ、こらあつ……そういう事、言わない、でっ……んにやあつ、ああ、ひゃあつ♡」

左手を濡らす愛液を見せつけると、恥ずかしそうにエレナが鳴いた。

胸と陰部への同時愛撫。されるがままのエレナには耐えがたいものがあつたのかもしれない。漏れ出す吐息の全てには、今にも絶頂しそうな艶やかさが感じられた。

「んあつ、あつふあつ、はっ、あん……ひあつはっ、あつあつ、んい、くうっ……♡」

右手は少女の愛らしい胸の突起で遊び、左手は少女の膣内を攪拌するように愛撫する。びくびくと痙攣するエレナの五体。

このままイカせてしまおうと指を加速させたが——その時。

「っ……すぐ、調子にのるんだからあ……！」

「——うわっ!?!」

途端、反撃とばかりに起き上がったエレナが、俺をベッドに押し倒してきた。

快楽から逃れるための必死な抵抗……否、それだけではない。仰向けに倒れた自分の腰上では、いつもの自信に満ちた表情の少女が見下ろしている。どこか嗜虐的に歪んだその視線を向けて、エレナはふふっと笑った。

「されっばなしは性に合わないわ。今回はわたし優位に行かせてもらおうかしら? 古きこと、新しきこと。全ての知をつまびらかにしてきたこのキャスターがもてなす快楽の神秘……存分に味わいなさいな、弟子^{マスター}♡」

俺のズボンの内側から雄の象徴であるペニスを取り出し、エレナはそう言った。

恐ろしいほどに怒張し、天を衝くかの如くに佇立する自身の肉棒。俺はと言うと相変わらず仰向けに倒れたまま……その上でエレナはいそいそと下着を脱ぎ、びしょびしょに濡れたロリスジを露わにしながら腰を下ろした。

「くっ……エレナ、それは……!?!」

「ふふん、貴方は動かなくていいわ。今回は私が主導権イニシヤチテを握って、貴方をイカせて……んっ、くう、ううん、はぁぁんあぁあぁっ……♡」

甘くとろけきった嬌声が響く。俺が見ている前で、エレナは自らの陰部と肉棒を擦り合わせるように、腰を上下に動かし始めたのだった。

「ん、ふうっ……ど、どうかしら? 可愛い声をあげても、よくってよっ……んっ♡」

勃起した肉棒を甚大な快楽が襲う。

ベッドに倒れた自分にとって、陰茎は垂直にも近い角度で起立していたが、それにエレナは自らの女陰を擦り合わせる形で愛撫していた。

ぐじゅ、くちゅ、じゅる。少女のロリ壺がペニスを撫でる度に、愛液が盛大に弾け飛ぶ。エレナのそれは毛の一本も生えておらず、そこには割れ目であるスジがあるだけだ。そん

な見るからに幼いロリ壺を肉棒に擦り合わせている光景は、挿入もしていないというのに、映像としても快樂としても凄まじいものがあつた。

「はあああつ、気持ち、良いでしょ……？ さっきは散々、好き勝手な事されたし……んっんんっ、今度はこっちの番よ……！ んあ、ああつ、くっううっ、ふうあつ……♡」

俺を見下ろす形で、自信たっぷりに尋ねてくるエレナ。もともと負けず嫌いな一面もあったが、その瞳は俺への対抗心に燃えていた。これも、彼女が俺に負けまいと考えたが故の行動なのだろう。

よく考えたものだ。これには単純な口淫フエラチオとも手淫手コキとも違った快感がある。幼女の盛り上がった恥丘がサオをサンドするように啞え込み、その状態で上から下、下から上へと動かされ……悔しい話、いつ絶頂を迎えてもおかしくない状況にあつた。

「あつやあつ、こ、れえ……気持ち良いところ、擦れちゃう……♡」

ただ、それはエレナも同じだった。

肉棒を自身のロリ穴で愛撫するという事は、逆に愛撫される事と同義なのである。

エレナのそれはある種、俺のペニスを使ったオナニーのようにも見えなくない。自らのロリ壺を使って俺を気持ちよくしているつもりだろうが、その快楽はもちろん自分にとって跳ね返ってくるのだ。

「あくうっ……ふああ、はううんっ……んあ、あんっあ、あっ、来ちゃ、うう……♡」

先程の乳首と陰部への愛撫によって快楽が蓄積していたのだろう。限界が見えてきた少女は腰をガクガクと震わせて、オナニーでもあるその動きを続けていた。

「ひゃっんん、んああっ……イ、イキそう、なんでしょ……？ んっ、精液びゅっびゅしたくて、おちんちんが震えてるわ……っ、ひうあっ、あんっ、んはあっ……♡ 我慢なんて、貴方らしくないわよっ、んっ、くうんんっ、ひっ、うんんああっ……♡」

それでも、エレナは俺の優位うっえに立とうと必死に平静を保たんとする。負けず嫌いだからこそ、先にイってしまうのが許せなかったのか。弟子マスタである自分にイ

ク瞬間を見られたくなかったのか。

「あっふあっ、はっ、はあんっふうっ……ひいうんっ、早く、イって……♡」

エレナは更に腰を加速させて、肉棒を撫でる幼穴の動きをより淫らにした。

見た目は完全に幼女なロリサーヴァント。その彼女が肉棒を使って自慰をしている風景は背徳的にして甘美なものがある。洪水のように染み出した雌穴を擦り付けるという事は、見方によってはマーキングしているようにも見えてくる。

そんな、目の前で繰り広げられる少女の卑猥な自慰風景は、こちらの興奮を爆発させるに十分な破壊力を有していた。

絶頂させようと必死にオナニーを続けるエレナだったが、その必要は無いほどに肉棒は昂っている。

そして――

「で、射精るっ……!!」

「いいわっ、いっぱい出しちゃいなさいっ……♡ あたしも、んっ……イ、クう、うう……
 んんんんっ、んんんああああっ……♡」

エレナの甲高い悲鳴を合図に、その瞬間、肉棒は射精の時を迎えた。

「あっんあっ、ふうんっ、くううんんっ……♡ んああ……白いのが、たくさん出て……♡」

亀頭の先端より、精液が噴水の如くに吐き出されていく。白くドロドロとした男の体液は、今まさに同時の絶頂を迎えた少女を静かに濡らしていった。

さながら精液のシャワーと言った感じだ。それを恍惚とした表情で受け入れるエレナの姿はこの上なく淫靡に映る。

「ん、ちゅぱっ、くちゅっ、んく……ふふっ、どうかしら私のテクニクは……？ 貴方をイカせる事なんて造作も無きことよ♡」

自分もイッたくせに何を言う……という本音は隠しつつ、ご機嫌なエレナに「すごく良

「かった」と感想を告げた。ある意味敗北宣言でもあったそれを聞いて、エレナが心底嬉しそうに笑う。

(エレナってわりと子供っぽいところあるよなあ……)

絶頂の余韻に浸りながら、しみじみとそんな事を考えた。

面倒見が良く、落ち着きがあり、外見とは裏腹に大人びたその少女。普段の印象とは別にもう一つ、外見通りの子供らしさがある事を自分は知っている。

見た目に即した幼さと、見た目に反した大人しさ。どちらのエレナも好きなので、主導権を握られる事に抵抗は無い。

すると――

「って、エレナ……!?!」

「あむっ、んじゅっちゆる、れろっ……んちゅじゆるっ……ふあ、ふあによ……? んんっじゆる、んう、んふう……ぢゅふう、ぷはあ……ひもひいいでしょ、これ?」

肉棒を美味しそうに口で啜えた少女は、ハッキリとしない発音でそう言った。

それはいわゆる「お掃除フェラ」である。精液を吐き出し痙攣を繰り返す肉棒に対し、エレナは舌と口内を使って掃除をしていた。

亀頭の先っぽから力なく垂れだす白濁液……それを舌で舐めとり、あるいは吸引する。尿道に隠れていた精液の残滓を吸い出すと、少女は美味しそうに喉を鳴らした。

「じゅるっんっ、ちゆる、じゅずずっ……んんっふう、じゆる、ぢゅむ、んっ、んう……♡」

エレナの舌先は亀頭や裏スジといった敏感な部分を責めていく。

すっかり硬さを失った陰茎だったというのに、エレナの口淫は容赦なく興奮を呼び起こした。

「あはっ♡ あれほどいっぱい出したのに、もう大きくなったのね……♡」

むくむくと起き上がったペニスを見て、エレナが愉しそうに笑った。

それが意味するところは、つまり……二回戦の始まりだ。

「よくってよ。今度は私の腔内なまに入れて気持ち良くしてあげる♡」

∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞

サーヴァントには『騎乗』スキルなるものが存在する。主にセイバーやライダーのクラススキルとして付与される代物で、キャスターであるエレナには縁の無いものかもしれない。ただまあ、今のエレナは間違いなく騎乗騎乗していた。

「——いいこと？ 私が動くから、貴方はじっとしていなさい。勝手に動いたりしたら承知しないんだからっ」

ベッドに横たわる自分を、跨ぐようにして立っている少女は言う。

彼女のその下にあるものは荒々しくもいきり立った肉棒だ。射精を終えたはずの剛直は、尚も天を衝くが如くにそそり立つ。視線を自らの息子から逸らし、そのまま垂直に持ち上げていくと、くぱあと広げられた少女の雌穴が存在した。

「それじゃあ入れるわね……ふふ、ごめんあそばせ？」

あくまで淑女然とした様子で、エレナは腰を少しずつ下ろしていく。ヨダレを垂らしたロリ穴が徐々に下降していき、佇立する陰茎の先端部と触れ合った瞬間。

「んっ、くうふうっ……んあぁっ、はぁんあぁぁっ……♡」

ずぶりっ、と。さながら槍の如く、肉棒は少女の秘所を容易く貫いた。

自身の膣内をつんざく男根の味わいに、エレナは肩を震わせて嬌声を鳴く。

「入って、きたぁ……♡ 貴方のおちんちん、私の深いところまで……くうんっ、ひぁっ……♡ 固くて、熱いのがぁ……ん、くうあぁっ、はぁん……お腹いっぱい……♡」

完全に腰を下ろしたところで、エレナが満足そうに瞼を持ち上げた。

その瞳は気持ちよさそうに揺らめき、こちらを虚ろな様子で見つめている。

もちろん、入れて終わりなどでは決してない。自分もエレナも挿入の快楽に意識が飛びそうになったが、要するにここからが本番だった。

「はあはあっ……動く、わね……ん、くうううっ……♡ ああ、これえっ……貴方のが出たり入ったり……っ、ひゃあっ、あっあん、あんっ、奥まで、すごい、来てえっ……ん、んあっ、あっ、んああっ♡」

エレナが腰を上下に振り、自ら肉棒の抽挿を開始する。

騎乗位——すなわち、エレナが俺に跨る体勢でのセックス。自身の視線の先では、初潮を迎えたかどうかも分からない外見の少女が、いやらしくも派手に腰を振り続けていた。腔内はとても狭く、肉棒をきゅうきゅうと締め付けてくる。こんな幼い少女が自分に騎乗し、しかもその肉壺で男を啜えている今の状況は、一言では表せないほどに背徳的で蠱惑的だった。

「んんっんうっ……おちんちん、奥まで刺さってえ……んあっ、これ気持ち、いい……♡
あくうんあっ、あっあん、んっ……止まら、にやいっ……♡ あっんはあ、あんんっ、や、あ
んっ、はうんっ、んああっ……これえ、好きになっちゃった、んんっ……あん♡」

エレナの動きはますます加速する。屹立した陰茎をいやらしく啜え込む少女の雌穴からは絶えず蜜液が流れ出し、パンパンと肉の打ち合う音が響いていた。

亀頭を自ら子宮口に叩き付け、快楽に耽溺するエレナの姿は幼女とは思えないほどに艶めかしい。一心不乱に腰を振り続ける少女の姿は実に魅惑的だった。エレナは俺に動くなと命令したが……ああ、これが動かずにいられるだろうか。

「えっあっ、ちよっと急に動かっ……んっ、ああっ、んあああっっ……♡」

その瞬間、不意打ちぎみな一撃を喰らったエレナが悲鳴を叫んだ。

責める側だったはずの少女を襲った快楽。肉壺でペニスを愛撫するだけだった、一種の自慰でもある行為に、突然下からの衝撃が現れたのだ。

俺が腰を持ち上げるように突き出すと、ちょうどエレナも腰を下げおろしたところだったのか、亀頭が勢いよく少女の子宮口をノックする。単純に計算して二倍の快樂は、エレナの余裕を打ち砕くに十分だった。

そのまま、自分もストロークを開始する。仰向けに倒れたままでこれは中々動きづらくはあったが、責められるだけは性に合わない。負けず嫌いなのは、なにもエレナだけではないという事だ。

「こ、こらっ……あれほど動くなって、言ったのに……ひうんっ♡ はあんっ、ふうんっ、んうっ、あっあんっ、あっ……待ちな、さいっ……そこグリグリしちゃ、らめっ……♡」

「エレナの膣内、すごく熱くて気持ちいいよ……！ それに可愛い……！」

「ひゃっ……そんな事、急に言わないで……！！ 今すごく敏感だからっ、あっあん、おまんこ……しゅ、しゅごく気持ち良くなっちゃって……んっ、んあっ、あっああっ、はっんあ、くうんんっ、んはっあっあっ、んあ——♡」

俺が動き始めると、恍惚に歪んでいたエレナの表情は更に淫靡な色に染まっていた。舌をだらりと垂らし、瞳をとろんと上ずらせた、だらしない素顔。思考もきつと定まっていないのだろう。

少女はひたすらに快楽を貪っている。

肉棒を啜え込んだ膣口からは、軽い絶頂状態にあったのか、ぷしゅ、ぷしゅ、と愛液がはじけ飛んでいた。

無論、余裕が無いのは自分も同じだ。

エレナのロリ壺の締め付けと腰使いの絶妙さが予想以上だったために、陰茎はもはや射精の秒読み段階に入っている。

それでも、イクのなら彼女がイッた後で——そうした一念によって爆発を抑えていた。

下から突き上げるストロークを更に強く打ち込み、少女の絶頂を促そうとする。その甲斐もあってか、エレナはアクメの寸前にある必死な様子を見せるようになっていた。

「こんなにやのおっ、おかひく、なっひゃうう……っ♡ おまんこ、貴方のおちんちんにじゅぼじゅぼ突かれてっ、あっあんっ、あッ、貴方の前なのに、イキそうに、っ……あうっ♡」

限界だ。俺もエレナも、もうこれ以上は耐えられまい。

膣内を攪拌する肉棒を通してそう確信する。

ペニスの抽挿はラストスパートに入り、子種を吐き出す準備を整えた。

「ん、んんっあっ、あんっ、ああんんっ、やらっ……もう、いっひゃう……♡ わらひっ、もう……んんあー！ えっちななの、止まらにゃっ……イクっ、あなたに、いっばいずぼずぼされてっ、んっくう、もうイっちやうわ……♡」

エレナの腰がガクガクと震える。

少女の雌穴はこれまでで一番強く収縮し、子種の全てを搾り取らんと痙攣する。——
その瞬間。

「エレナ、膣内ですぞっ……！！」

「んああっんんっ……膣内っ、膣内です出して……っ♡ おちんぼからびゆるびゆる精液、出

して……っ、私の子供おまんこ、貴方の精液で種付けしてえ……っ！！」

この上なく卑猥なエレナの台詞。それが俺を喜ばせるためのものだったのか、それとも無意識の内に出た台詞かは分からない。だが、その要求には全力で応えるつもりだ。

そして――

――ビュルツ、びゆるるるるツツツ！！！！

「んっ、んんっ、んうんんんんっ……！！！！　あなたの、元気に射精してるっ……♡
赤ちゃんのお部屋、貴方の魔力でいっぱい満たされてる……♡」

俺が腰を天高く突き上げた刹那。

エレナがそのロリ膣全てを使って肉棒を咥え込んだ瞬間。

びゆる、びゆる、びゆるっ。溜め込まれた欲望は一斉に開放された。

背中をのけ反らせて絶頂するエレナの膣内で、肉棒は熱く濃厚なザーメンを軽快に注ぎ込む。

「んう♡ あっああっ♡ んはあっ……♡」

総身を震わせ、膣内射精の快楽を味わうエレナ。

同時に絶頂を迎えたのだ。優位に立ちたいという彼女の面目は一先ず保たれたと言えるだろう。

やがて長い長い射精が終わり、その幼い身体に種付けをされた少女は疲れ切ったように倒れ込む。

「よくってよ……貴方との子供、なら……ん♡」

うわ言のように小さな少女の呟き。

エレナは俺の胸に倒れたまま眠ってしまったが、彼女の膣内にはいまだ抜け落ちる事なく肉棒が刺さっていた。

まるで受精する瞬間まで栓をしておくかのように――。

∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞

「よいしょっと……さ、これで元気になったでしょ？ それとも疲れちゃったかしら、ふふ」

事後、エレナはいつも通りの肅然とした彼女へと戻っていた。

乱れに乱れていた先程の色っぽさはどこへ消えたのか、少女の様子に変に意識したところは存在しない。

俺自身も、サーヴァントの召喚失敗に落ち込んでいた気持ちは何処へ行ったのやら。エレナのおかげで、悩みの一切が吹き飛んだ感じだ。

ほんと面倒見が良いというか、世話好きというか……エレナは母性の塊だなあ、とつくづく思う。

「また何か辛い事があつたら私を頼りなさい。何度でも励ましてあげるから」

天真爛漫な笑顔を見せてきた少女。このカルデア唯一のおかん属性を持つサーヴァントは、どんっと胸を張ってそう言った。

きっとこれからも彼女を頼る事は多いだろう。種火周回や、種火周回。それに、種火周回の場面でも。色々とお願ひする場面は出てくるはずだ。

それでも大丈夫？ と尋ねると、彼女はやはりお決まりの台詞を告げるのだった。

「よくってよ、この私に何でも任せなさい♡」

(可愛い……)

あどけないその笑顔に、心は一目で魅了されていた。

何かあつたらまた彼女にお願ひするでしょう。うん、それがいい。

靈基No.05 武則天



PROFILE

身長：138cm 体重：35kg

中国史上唯一の女帝。マスターを自分だけのものとするために自己研鑽中。

魔力供給回数：108回 絶頂回数：154回
好きな体位：騎乗位 処女喪失日：召喚から32日目

妊娠確率：55% 【安全日】

基本的に主導権を握りたいタイプだけどたまには立場が逆転するのも善き。そういう時は普段より確率が高くなるらしい。

STATUS

絆LV 100  Next 

性欲：C	★★★★☆	知力：A	★★★★★
体力：D	★★★★☆	母性：B	★★★★☆
従順：E++	★★★★☆	反抗：A	★★★★★
淫乱：D	★★★★☆	感度：B	★★★★☆

「くふふー、妾の玉体はどうじゃマスター♡ そなたの大好きな童女の口リ壺……とくと味わうが良いぞ♡ にぱっ☆」



SECRET GARDEN EX

SG1：努力家

非常に努力家で勤勉。知らないことがあれば積極的に学習する。そうして育まれた夜伽のスキルをマスターに褒められるとすごく喜ぶ。

SG2：加虐趣味

拷問が好き。けれどもカルデアでは「どれだけ相手をイかせず」「最大最高の快楽を与えられるか」に趣旨が変わっている。ある種の拷問。

SG3：リーダーシップ

天上天下唯我独尊。女帝として君臨する彼女は決して人前で弱さを見せない。しかしマスターと二人きりの時は見ている側が胸焼けするほどの甘えっぷりを発揮する。

WEAK POINT

bust：★★★

少女のワガママな部分を表したような、小ぶりでありながらも堂々と主張する双丘。見えそうで見えない、だがそれが良い。

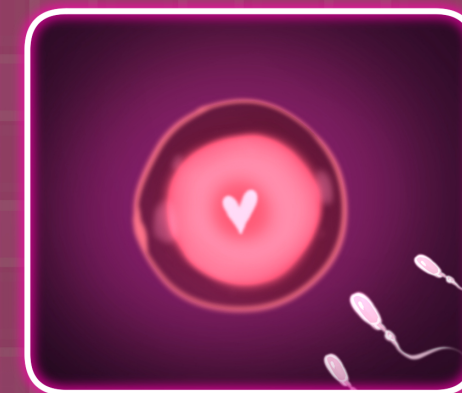
neck：★★★★★

首輪をされるプレイが実はお気に入り。お願いすれば耳と尻尾も付けてくれたりする。ただし猫用のものはダメ。怒る。

vagina：★★★★★

至高の器。玉体。己の肉体を最高と謳う彼女の自慢の蜜壺。一度囚われたが最後、ヒダの一つ一つに撫で回され、快楽が毒のように染み込んでいく。

LIVE



状態：♥♥♥

マスターとの間にいずれ跡継ぎを設けたい。けれど女帝としてそう簡単に孕まされるわけにもいかない……そんな葛藤にも悩んでいる。

「取り調べじゃ！」

「……は？」

ある日の昼下がりのこと。それは、そんな一言から始まった。

マイルームで休んでいた自分のもとに、血相を変えて飛び込んできたそのサーヴァント。波打つような紫髪が特徴の、和装に身を包んだ女の子だった。

「ええっと……急にどうしたのかな武則天ちゃん、そんなに慌てて」

「こらーっ！ 妾をちゃん付けで呼ぶでない、怒るぞ！」

まるで童女に対するような俺の呼び方に、その少女は顔を真っ赤に赤らめて憤慨する。

真名を、武則天。あるいは不夜城のアサシンと呼ばれる少女。つい最近このカルデアに召喚されたばかりの彼女は、騒然とした様子を告げてくる。そのまま有無も言わず何処かに連れていかれ、辿り着いた場所で少女は怒りを露わにこう告げるのだった。

「皆に集まってもらったのは他でもない……このカルデアで起きてはならぬ事件が発生したゆえな。妾は為政者として、貴様らを調べねばならん事になった。なので単刀直入に問わせてもらおうとだな……つまり——妾の“ふれみあむろーるけーき”を食めべたのは誰じゃ！」

幾人かのサーヴァントたちが集められたその一室に、武則天のそんな一声（半泣き）が轟いた。

「くぬぬー、よりもよって妾の菓おやつ子に手を付けるとかー！……う、うむ！いま名乗り出れば爪剥がし・五寸釘打ち付けの刑だけで赦してやろう！妾の寛大さに感謝するがよい！」

事情はおおむね把握した。武則天が何故あも怒っているのか。

そしてなぜ自分たちが一か所に集められたのかという彼女の怒りの原因、理由らしきものは理解した。

つまり、お菓子である……そう、お菓子なのだ。少女が大切に冷蔵庫にしまっていたはずのそれが何者かに食べられたので、その犯人捜しが始まろうとしているのだった。

「お菓子の恨みは恐ろしいものです。『そんな事くらいで何を大きさに……』と本心を口に出してはなりません、先輩」

同じく連れてこられたのだろうマッシュが、小声でボソツと呟いてくる。

いやまあ肩透かしに感じていたのは事実だが、しかし——

「やはり自白はせぬようだな盗人め。なれば妾にも相応の準備がある。酷吏はまだ置いておらぬからの、妾とマスターで貴様らを取り調べてやろう。持ち物検査というやつじゃ！」

「うーん、それはどうなんだ？ それって仲間を信用してないって事になるし……」

「現に妾のおやつが盗まれておるのじゃ！ 誰も信用できぬわ、おろかものーうっ！」

どうやら、少女の怒りは存外深いところにあるようだ。

こうして皆を集めたのも、この中に犯人がいると確信してこそその判断なのだろう。

少女曰く、菓子を盗まれたのはついさっき。どこかに隠す時間は無く、犯人はきつとも持ち歩いているはずだとアサシンは推理している。

「それでは任せただぞ、マスター。この場にいる者すべてを調べてみせよ。妾はそれを見極める立場にあるゆえ、飴玉一つとて隠させるでないぞ」

「……よし、分かった。そうまで言うなら、まずお前から調べさせてもらうぞ。これで『自分が持っていました』なんて事になったらシャレにならないからな」

「ま、当然であるな。妾が潔白である事など、わざわざ証明する必要も無い事だとは思うが……うむうむ、念のためにの。妾の正しさは絶対的に証明されておらねばならぬからな」

そう言って、少女は自分が持つ全ての道具なり武器なりを机上に広げてみせた。

(小さい) 胸をこれでもかと張って、自らの潔白を確信する。

……確かに、この中にお菓子の類は無いようだ。

あるのは毒の入った酒壺と、拷問用の釘や縄、注射器、それに各種刃物という物騒なモノばかり。

「ふふん、どうじゃ？ 妾はやっぱり潔白であつただらう？ こう、頭をナデナデしたり……遠慮なく褒めてくれてもよいのじゃぞ♡」

「いや別の意味で真つ黒だよ。ここが警察なら捕まってるぞ？」

だがまあ、お菓子が消えたという話は本当のようだ。気は進まないが、仕方がない。皆の潔白を証明するためにも、ここは一先ず全員の持ち物を検査しよう。

「それじゃあ最初はアリスとジャックからお願ひね。持ってるものを見せてごらん」

「うん。私たちはこれと、これと……これだよ♪」

「ナイフとナイフとナイフか……うん、ジャックはいつも通りだな。(この際、深くはツッコむまい……) それじゃあ、次はアリス。……アリス？」

視線を動かして、もう一人の少女の顔を覗き込む。

しかし、どうした事だろう。快く手持ちを明かしてくれたジャックとは反対に、アリスはひどく躊躇いがちな様子を見せていた。

まさかとは思うが、アリスが犯人なわけ——そう不安に思っていると、その時、少女が後ろ手に何かを隠しているのに気が付いた。それを半ば強引に取り上げると必死に抵抗してきて——

「か、返すのだわ！ 見ちゃダメなのだわ！」

「ん？ これは本か……どれどれ」

パラパラとページをめくってみる……なるほど、その事情を理解した。これは没収せざるを得まい。表紙・内容を見ても、R的な何かである事は確かだ。

「ああっ、せっかくのマスター(♀)×マシユ本だったのに……ひどいのだわ、マスター！
没収なんてあんまりかしら！ バッドエンドは大っ嫌い！」

「わ、私が……先輩(♀)と……はう」

よし、次へ進もう。

変な世界にハマりつつある少女と後輩が若干気がかりだが、無視だ無視。

「次はメルトか。じゃ、お願いね。まあ大丈夫だとは思うけど……」

「そうね。まったく……面倒な事この上ないわ。でも、ま。濡れ衣を着せられるのも不愉快
ですし、協力はしようかしら？ 私が持つてるものなんて、これくらいよ」

「これは……人形？」

メルトが出してきたもの……それは人形だ。
それも人形ドールではなく人形フィギュアと言った感じの。

「——そう、その通りよ。人形はいいわ。ひたすら愛しても文句を言わない、不満をこぼさない、変わらない。私、人間の消費文化は愚かだと思うけど、フィギュア文化を磨き上げたところは感謝しているの」

「え」

「事の起こりはやっぱりヴィーナス像ね。ギリシャ始まった。そうとさえ思ったわ。でも特にお気に入りはスケールモデルよ。360度、舐め回して鑑賞できる支配感、所有感は最高だもの。あ、でもアメトイはダメね。ガチムチすぎる。こと工芸において、日本人の繊細さに勝るものはないわ。私の夢は失われたガレキ職人たちを集めて、私のトイ・ストーリー王国を作ること。もちろん職人たちも人形にするから——」

「待ってメルト！ その話また今度聞くから後にして！」

隙あらば人形語り。恐怖さえ覚えるほどのマシンガントークである。

メルトにこんな趣味があったとは意外だったが……こう、彼女の『シークレット』な『ガーデン』を垣間見てしまった気分である。気を取り直して――

「……次はあたし？ そんなに見たいの？」

そうわざとらしく挑発してきたのはアーチャーのサーヴァント、クロエ・フォン・アイントベルンという少女だ。小悪魔じみた笑顔が印象の齡〇歳の女の子である。

彼女のいたずらな性格など今に始まった事でもないので簡単に受け流すとして、肝心の持ち物を見つみると――

「こ、これは……!!」

「どうしたの、お兄ちゃん？ これ？ 今時のJSなら必需品でしょ必需品？」

少女が「必需品」と称して机に広げたのは「小さな正方形の袋」だ。中にゴムで出来た某を封入した、男女の交際でよく見かける性遺物。これは、もしかしくともコンド——

「あ、もしかしてしたくなっただんでしょ。小学生に興奮しちゃうとか……お兄ちゃんのエツチ♡ でもせっかくサーヴァントなんだし、魔力供給は生でしないとね♪」

「先輩……」

「——次ッ！ 次へ行こう！」

これ以上相手にはしてはマズい、純粹に本能が（マシユの視線を受けて）そう判断した。

まったく、クロエにも困ったものだ。そんな言い方をされては、まるで俺が小学生に欲情する変態のように思われるではないか。まったくけしからん。

（しかし、だいたい見てきたけど怪しい奴はいなかったなあ……武則天が嘘を言ってるとも思えないけど、本当にこの中に犯人がいるのか……？）

そうこうしている内に、取り調べという名の持ち物検査は最後の一人に差し掛かった。犯人が出てこない事を半ば確信しつつ、最後の一人に向き直る。

「最後は茨木か。けど、茨木は何も持ってなさそうな——!?!」

「ほうじえんじや。もきゅもきゅ。わえがあにゆえほうぞくあつふあいさえねばならぬ。もきゅもきゅ。ふえんほうちふあいもはなはなしふあ。(訳：当然じや。もきゅもきゅ。吾が何故、盗賊扱いされねばならぬ。もきゅもきゅ。見当違いも甚だしいわ。もきゅもきゅ)」

犯人、見つかった。多分、いや間違はなくこの子が元凶だ。

「どうかの、マスター？ 怪しい奴は見つかったか？」

「えっ!?! あ、いやっ、どうだろう……」

武則天に声を掛けられ、思わず反射的に答えを濁してしまう。

それもそうだ。口をもきゅもきゅさせていても、それだけで犯人と決めつけるのは良くない。たとえ口をもきゅもきゅさせていたとしても、それだけでは証拠となり得ない。と思う。

「もきゅもきゅ……んっ、ごくん。……それにしても、たかが菓子如きで騒ぎ立てるとは、貴様はげに幼稚よな。女帝の名が聞いてあきれるわっ！」

「!? くぬぬー、妾を輝ける正道の都市の主と知って愚弄するとは、貴様あー！」

茨木の挑発に、武則天が声を張り上げて対抗する。要するに子供の諍いだ。

「だいたい、貴様はそれに名前でも書いておったのか？」

「ぐっ……確かに、名前は書いてなかったかも、しれんが……」

「それ見たことか。己が所有物に名前を書いておくことなぞ万古不易に通ずる常識よ。あれほどに美味じゃった代物だ。名前も無ければ、喰われて当然よな」

「それは……そうかも、しれんの……」

「言い負かされたように萎縮する武則天ちゃん。だがよく聞いてほしい。アイツいま「美味じゃった」とか言ってたぞ。」

「というわけで、吾は帰らせてもらう。今回の教訓、ゆめゆめ忘れるでないぞ」

そう言って、茨木は（まるで逃げるように）部屋を後にしていった。

彼女に続いて他のサーヴァントたちも帰っていき、残されたのは自分と落ち込む武則天ちゃんだけという結果に。

「ぐすっ、うう……妾の、ぷれみあむろーるけーきがあ……」

「……………」

楽しみにしていたお菓子を奪われ、その犯人も見つけられなかったとあっては、少女が落ち込むのも無理はない。さて、なにか自分に出来る事はないだろうか——？

∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞

「……もういいかな？」

「まだまだ足りーん！ もっと妾を慰めろー！」

マイルームに戻ると、武則天が猫のように甘えてきた。

先程の一件が相当ショックだったのだろう。俺の膝に座るその少女は、これでもかと思いを差し出してくる。

「……マスター、妾は悔しい、悔しいぞ。本来、妾の高貴なる姿を拝謁したならば、みな平伏したまま何も出来なくなるのが道理であろうに……カルデアには不遜な輩がまるで多すぎる」

頭を撫でてあげると、少しだけ落ち着いたのか、少女は愚痴を呟いてきた。

「やはり酷吏を置くべきかの。妾が生前強いた密告制度は、それはそれは、ばーふえくと”で”ごーじゃす”な統治の実現であった。こうなれば、密かに妾の理想を……んにゃあっ!？」

「そういうのはダメって、前にも言ったでしょ？」

「うう、分かったのじゃあ! だから頭をわしゃわしゃするでない、くううう……!」

お仕置きの意味で髪を乱暴にかき乱す。

密告——すなわち罪を報告し合うという相互監視の社会は、いわば武則天である彼女

の代名詞とも呼ぶべき国の在り方だ。以前にそれはダメだと説明したはずなのだが、どうやらまだ諦めてはいないらしい。

「仕方ないであろう……斯様な事件も、密告制度が敷かれておれば防げたやもしれん。防げずとも、罪人を罰する事は出来たはずじゃ」

「だからって、必ずしも裁く必要は無いんじゃないかな？ 罪を見逃さない姿勢は大事だけど、赦すのもそれと同じくらい大切な事だと思うよ」

「……貴様はほんとに不遜がすぎるな、マスター。妾に意見する者なぞ、生前では一人としておらんかったというのに……だが不思議と、貴様の言葉は心に染みる」

くたっと自分の胸に倒れ込んできた少女は、ぶつぶつと文句を言っているものの、どこか嬉しそうにリラックスしていた。

今回の事件の犯人？ である茨木には後で個別に事情聴取するとして……このままでは武則天があまりに可哀想だ。なにか彼女にもそれ相応の補償があるといい。そう、例えば

他の誰かであれば問題は無かったと少女は言う。俺からの貰い物、プレゼントだからこそ受け取れないと少女は照れ恥ずかしそうに言う。そんな事を言われては、自分としても嬉しいような恥ずかしいような、如何ともしがたい感情に襲われる。

「だ、だったら食べ物以外で欲しいものを言っつてよ。それなら受け取ってくれるでしょ？」

「……なんでも良いのか？」

「うん、何でも言っつてごらん」

そう言うのと、武則天は深く考え込む様子を見せてきた。消耗品でなければ、気兼ねなく彼女も受け取ってくれる……そう考えたからこそその提案だ。

しばしの沈黙。長いこと悩み込んだ末。

やがて答えが決まったのか、少女は顔を真っ赤にして小さく呟いた。

「……がほしい」

「え？　なんだって？」

「だ、だからあ……がほしい、と言ったのじゃ」

あまりに小さく、そして判然としない呟きだ。

思わず聞き返してしまったが、言い直した後の台詞さえ肝心な部分が聞き取れない。

いったい何が欲しいというのか。業を煮やして聞き返した三度目の要求に、ついには極まったのか、少女は恥ずかしそうにこう言った。

「マスターがほしいと言ったのじゃ！　妾に何度も言わせるとか、不遜すぎてビックリするーっ！　っていうか妾に言わせるなあー！！」

鼓膜を強く打ち叩いたその台詞。

意を決して告げた少女の言葉には、彼女なりの情熱が込められていた。

無論、その熱量が誰に向けられていたかは語るまでもない。「マスターがほしい」という

単純な要求が何を意味しているのかも、分からぬはずはなかったのだ。

「もつと喜べ、そして泣き喚け！ 妾ほどの女が想いを告げてやったのだぞ、こう……もつと驚いたり歓喜したりするべきであろう！ マスターはデリカシーが無さすぎじゃ！」

呆気に取られた俺の様子を見て、武則天は不満を露わにしてくる。

リアクションに乏しかったのは謝るが、実のところ十分に驚いているし喜んでくれた。それだけ、彼女の告白は直球にすぎたという事だろう。

あまりの事実に、自分は声も出せずにいる。

「その、今だけは特別に……妾を抱く事を許可してやらんでもないぞマスター。貴様なら良いというか、貴様でなくてはならん、というか……ええい！ これ以上、妾に言わせるなバカァっ！！」

少女は恥ずかしそうに目を伏せる。

わなわなと肩を震わせ、恥辱のあまり泣き出しかねない様子だ。

そんな彼女の表情を見ると、やはり男として応えずにはいられなかった。

「んひゃっ！ ま、ますたーってば急に激しすぎるのじゃ、もう少し風情というものをだなあ……」

驚きと不満を零す武則天に、ごめんとだけ一言謝罪する。

ベッドに押し倒してしまった事は俺が悪い。

だが、そこまで俺を魅了してしまった彼女にも責任があると思うのだ。

「……良い、特に赦す。その代わり、優しく愛してほしいのじゃ、マスター……」

両手を上げ、受け入れるようなポーズを取ってきた少女に、心は無意識の内に引き込まれていった。幼いその肢体は、自分にとってあまりに凶悪に過ぎたのだ。

∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞

「ンンっ、ふう……んあ、あうん……♡」

簡素な造りの為された室内を、少女の淡い吐息が反響する。

気持ちの良いよがり声。

己が身体を舐められる感触に、武則天は押し殺すような声を漏らしていた。

「まず、たあ……ふにやつ……そんな、焦らすのように舐めるでない、バカあ……♡」

ツンと盛り上がった乳首、その周囲を丁寧に舐め回す。両腕はちょっとしたお姫様抱っこのように少女を抱え、曝け出された彼女の胸元に顔を近づける。

まだ直接触れてはいないというのに、既にその頂はぷっくりと浮かび上がっていた。小柄な彼女同様、小指の先端ほどもない乳頭は、いやらしくも存在を主張する。

「あっ、ンあっ、はあうんっ……妾を焦らすとか、不遜じゃぞまったく……んっ♡」

乳輪の外をなぞっていく愛撫。そろそろ頃合いだろうと舌を離すと、そのまま彼女の突起に吸い付いた。途端、待っていたとばかりに武則天の口から甘い声が漏れ出し、そんな彼女の反応を耳で楽しみながら、自分は口内で少女の乳首を遊び始めた。

「あんっ、ん、ふあっ……ますたーに、っ、舌でこりこりって、されへっ………んんっ、んっ、はあんあっ、おっぱいの先っば、びりびり、しちゃっ……ひゃあんッ……!!」

僅かに硬くなった頂を舌で弄ぶと、武則天の表情が見る見る内にとろけていった。

普段から胸元を広げ、見えそうで見えなかったのが彼女のそれだ。今までこちらも焦らされていた分、暴かれた時の興奮は想像を超えたものがある。

「くふふっ、そんなに妾のおっぱいが見たかった、のかっ……くう、んっ♡ ならば存分に堪能するとよいぞ、マスター♡ 貴様の好みは、妾のような小さきおっぱいなのであろう……？ 童女の胸に欲情するとか……貴様は度し難い程の変態じゃな……んふああっ!？」

こりっとした乳首を甘噛みすると、武則天の身体がびくんと跳ね上がった。

まったく心外である。彼女のちっばいに夢中になっているのは事実だが、それで変態と罵られる言われは無い。平坦な盛り上がりの上に、小粒のような苺が乗っている幼女サイズのおっぱいとか……ぜんぜん好きじゃないし。

「そう自分を取り繕うでない、マスター……貴様の劣情、妾にはよく伝わっておるぞ♡ほれっ、妾のロリまんこ……弄りたいのじゃろう？ にゃは☆」

そう言って、少女は和装をずらすようにして己の秘部を見せてきた。

毛の生えていない、つるつるの陰裂である。

手招きされるかの如く、視線は彼女の幼スジに導かれていく。

「んあッ、ふにゃあんっ……!! ますたーの指、妾の膣内に入ってきてえ……♡」

指の一本を陰部に潜り込ませると、途端、武則天が甘い嬌声を鳴き出した。

胸への口淫も続けたまま、少女を抱き支えた方とは別の腕で愛撫する。

外見通りキツく閉じ切った雌穴は、指の一本でさえも限界のようだ。
押し広げようと内部を攪拌するが、少女の膣穴は何度もこちらを締め出そうとする。

「あつ、あん、んあぁっ……そんな、いきなり激しく、だなんてっ……壊れて、しまうではないかっ……！　んくう、うう、ふうっ、あつはぁんっ……♡」

指を何度も抜き差し、次第に武則天の声は甲高いものに変わっていった。

熱く熟しきったロリ穴からは愛液が溢れ出し、じゅぶっ、じゅぶっ、と噴射するように掻き出されていく。

「くっふふー……良い、良いぞっ……♡　妾のおまんこ、ますたーの指でもっともっと広げてっ……ひい、く、ううんっ……ロリまんこ、貴様の望む通りにイカせてみせよっ……んあっ♡」

「じゃあお構いなく……」

「ふひゃあっ……！？ ま、ましゅ、たあ……♡ そこっ、指で擦られると……ん、ひうっ……びくびく、してえ……やっあん、こ、この身体では、気持ち良いところに当たっちゃって……んあっ、はあっ、ああ、んにゃあっ……♡」

あくまで挑発的な台詞を繰り返す武則天に対し、こちらも愛撫の強さを上げていく。指を折り曲げ、少女のお腹の裏側を擦るように。小さく勃起したクリトリスを指の腹で弄り、彼女の幼い雌穴をこれでもかと弄ぶ。

やがてほぐれてきたのか、頃合いを見て膣内に二本目の指を差し入れた。相変わらずのキツさに二つの指がヒダに挟まれるが、それでこそ犯し甲斐がある。

もちろん胸への愛撫も忘れていない。乳首に吸い付いたまま、ぐじゅぐじゅと音を立てて舐め回す。口内で転がる少女の頂は、程よい硬さと柔らかさを孕んでいた。滲み出す汗と交わって、その味は甘美に染み渡る。

「んんう、あうんっ……もうっ、イキそうじゃマスター……♡ 妾の初心なおまんこ、またーの指でイッチャうっっ……ん、ふう、ああっ、あああんんっ♡」

痙攣する膣道。収縮する内部の感触に、少女の絶頂が近い事をこちらでも確認した。指はいつのまにか三本目の侵入を果たしている。秘部からは熱くトロけきった蜜液を吐き続け、初めは余裕のあった彼女の様子も、今は鳴りを潜めて身体を震わすばかりだった。

「あっはあ、やっ、んあっ、ああっ……♡」

一気にキメてしまおう、そう思い立つと手淫の動きは目に見えて加速した。

武則天はびくびくと身体を震わせ、萎縮し——指を奥まで突き入れた刹那。

「ん、にやああああっ……まじゅたーの指で、イカされりゅううっ♡」

電流が走ったような震えと共に、絶頂の叫びが空気を響かせた。

ぷしゅ、ぷしゅっ。最高潮に達した少女の陰部からは、小刻みに愛液が噴射される。身体をのけ反らせ、天井を仰ぐように顎を上げさせた武則天は、恍惚とした様子で余韻を味わうのだった。

「んあ……はあ、はあっ……まったく貴様という奴は……♡」

指で達してしまった事を恥じているのか、少しだけ微妙そうな表情をした武則天。そんな様子を可愛らしく見ていたら、少女は納得いかない様子で体勢を立て直し、

「再戦ゆかなおしを要求するっ……！ くっふふふー、妾が攻め手に回れば貴様なぞ足ガツクガク……今度は妾が貴様を快楽の世界に導いてやろう。嬉しく思うのじゃぞ。にぱっ☆」

再戦——つまり二回戦を求めてきた少女は、まだまだ足りないと言わんばかりに尻を向けてきた。いまだ絶頂の衝撃にひくひくと震えている一本のロリスジを、である。

「ほれ♡ 妾のロリマンコに挿れたくて、たまらんのじゃろうマスター？」

挑発的な態度はともかくとして、武則天の言う通り、自分も我慢の限界が来ていたようだ。ズボンの内側では今か今かと陰茎が解放の時を待っている。

「くふっ、ほんに妾は罪作りな女じゃ。妾の妖艶さに我慢ならなくなったのであろう？
ん？」

そう問われると、頷く以外にはあり得ない。

未成熟ながらもやはり女の子としての意味を表す陰裂は、それだけで蠱惑的に映ってしまふし、手淫直後のロリ穴は、まるで単体の生物のように淡い熱気を放っていた。それを見せられて我慢しろという方が無理な相談だ。

「んっ、く……妾のまんこに、マスターのおちんぼの先がキスして……♡」

四つ足を突く姿勢でベッドに寝そべった少女の背後に立ち、取り出したペニスの先端をその尻肉に押し付ける。禍々しく反り返った肉棒は、秘部に吸い付くようにして沈んでいった。

扇情的な光景である。何倍も体格の小さい少女を相手に後ろから襲うこの体勢。菊門まで丸見えとなりながら、少女の雌穴は拒むことをしない。

「早く……♡ 早く挿れてほしいのじゃ、マスター♡」

おねだりをするようにお尻をふりふりと揺らしてくる武則天。

ああ、もう耐えられない。このエッチなロリサーヴァントを征服したいと衝動が溢れた瞬間、未成熟だったロリ膣を龟头の一突きで貫いた。

「ん、ああ、ああああっ……ましゅたーのおちんぼ、妾の膣内に入って、きたあっ……♡」

後ろから力強く腰を突き出した一撃。

膣道の一番奥までを貫いた肉棒の感触に、武則天が快楽に揺蕩う甘い嬌声を鳴き出した。

「はあ、んあっ、あっふあっ、んんっ、ふう……ひう、あっあっ、あっ、あんっ、あうん♡」

指で広げたとはいえ、少女の膣穴ははまだ十分な狭さを誇っている。

肉棒はそんな彼女の膣内をトロトロに崩し始め、深いところまで届かせようと刺激した。

「マスターの、おっきくてっ……んあっあ、にゃ、あうんっ♡ 分かるかマスター……妾のおにゃか、おちんちんのカタチに膨らんでおるのじゃぞ……妾のようなロリサーヴァントに挿入するとか、マスターはどうしようもない変態さんじゃっ……ひゃうん♡」

どこにそんな余裕があるのか、少女は嗜虐的な表情を浮かべてこちらを挑発する。

決してそのような気はなかったのだが、武則天の半ば罵倒のようなセリフを受ける度に、身体をぞくぞくとした興奮が駆け上っていった。

「あつくう、んんっ、んう、はあっあんっ……！　ますたー、ますたーっ……♡　もっと遠慮なく、突いてよいのじゃぞ……！　妾を小娘扱いするでない、貴様の好きなようにおちんぼしてよいのじゃぞっ、ん、くううっ……♡」

未熟な膣口は痛みすら覚えるほどに締め付ける。

突けば突くほどに纏わりつく肉ヒダのおかげで射精感は少しずつ込み上げていくが、自分とて手加減をしているつもりはない。

もう少しギアを上げてみよう。少女の淫猥な台詞にそう判断すると、ペニスの抽挿は一

段と激しさを増した。膣内を攪拌する肉棒の動きは、もはや労ることのない、ただただ犯すだけの乱暴さに支配されていく。

「かひゃ、激しっ、んうっ……！　ますたーの、一番奥までコツコツしてりゅっ……♡」

流石に効いたのだろう、武則天は次第に呂律すら回らぬ様子で喘ぎ出していた。

吐息は甘く、悲鳴は艶めかしい。本来幼女が出すはずのないとろけきった嬌声には十分な破壊力がある。幼い膣への律動は加速させる程度には魅力的だ。

「んにゃあっ、あ、んやあっ……そこ、ぐりぐりされりゅのっ、すごく感じて……んっ、あ
あっ、はあうんんっ、ふやああっ……！　ま、ますたーのおちんぼ、凶悪すぎじゃあっ……
♡　こんにゃにされたら、もうこれ無しでは生きられぬではないかっ……♡」

故意か、無意識か。いずれにせよ、少女の台詞はどれもが卑猥にすぎた。

パンパンっと腰を打ち付ける度に武則天は高い嬌声を泣き叫ぶが、その声はすっかり快樂の色に染まっている。

「あつ、あ、あ……マスターの、また更に膨らんだぞ……射精したいんじゃない……っ！ 妾のロリマンコにびゅうーびゅうーしたくて、破裂しそうなんじゃない……っ！！」

膺ヒダを圧迫する男根の感触に、少女は身体をざわざわと震わせて喜んだ。

彼女の感じた通り、肉棒は射精感に包まれ、爆発のタイミングを待っていた。目に見えて硬さと大きさを増したペニスに、持ちこたえるだけの余裕なんて微塵も無い。

「くふっ、出して良いのだぞ……ていうか命令じゃ……！ 妾の子供まんこに中出しして、種付けしてくれなきゃ怒るからなっ……あうん、あつ、あつ、はあああ……♡」

なけなしの理性はそこで完全に瓦解した。この小さな身体の中に射精する事への少なからず存在した抵抗は、少女の卑猥な要求によって崩壊を遂げた。

抽挿は最終段階へと突入する。背徳的な交わりに終わりを告げるべく、肉棒は少女の最奥へと確かに到達した。そして亀頭が彼女の子供部屋をこじ開けた瞬間――

——ドクンッ、ドピユッ、ドピユーツ、ドピユルルルルッ!!!!!

「ひゃああんっ……! あっ、ふあ、んあっ……んにゃ、あああ……♡ 妾のにかかにい、あついの、ドクドクって……んんっ、中に、どんどん入って、来てるのじゃあ……♡」

溜め込まれた射精感は、子種とかたちで少女の膈内に注がれた。

幼い子宮が満杯になるほどの膈内射精。

腰が抜けるほどの快楽に、ただただ射精を繰り返す。

「あっ♡ やっ、らめっ♡ これ、しゅきになっちゃう……♡」

身体をベッドに押し付けられ、完全に組み伏せられた状態で中出しされたというのに、武則天は嬉しそうに声を震わせていた。

ちようど絶頂も来たのだろう。痙攣する膈穴は、精液を搾り取らんとペニスを締め付ける。

やがて出し終えた肉棒を引き抜くと、少女のロリ穴からはドロッと精液が垂れだすのだっ

た。

∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞

「まったく……マスターは精力が異常じゃ。こんなに出しおって、本当に孕んでしまったらどうするのじゃ。仮にも妾は女帝なのじゃぞ」

いまだ熱も冷めやらぬ中、膝上に座るその少女は悩まし気にお腹を見つめていた。

錯覚かもしれないが、僅かに膨らんでいるようにも見える胴回り。あれだけ射精したのだ。多少なりともお腹がキツく感じていても不思議ではない。もしそうだったなら申し訳なく思ってしまう。

「良い、妾も怒っているわけではない。ただな、妾は万一にも孕むわけにはいかぬ。そう考えると、此度は些か羽目を外しすぎてしまったようにも感じるのじゃ」

「万一つて……（そりゃあ問題はあるだろうけど）何かダメな理由でもあるの？」

彼女の言葉に感じた些細な違和感を追求する。

それに武則天は「当たり前じゃ」と寂しそうに告げた。

「妾はサーヴァントとして二度目の生を受けた。なれば当然、妾の国をもう一度……と願うであろう。だが、身ごもった女に為政者は務まるまい。国を治める上では致命的となるかならな」

言いたい事は分からないでもない。妊娠した職員が産休に入るようなものだろう。その間、国を治める者はいなくなるし、彼女が統治者としてあるのなら、それは実に致命的だ。だったら——

「次の国は、俺と一緒に治めたり……ってのはどうかかな？ ほら、共同統治者のな。それなら妊娠しても、俺に任せられるから大丈夫でしょ？ なーんて」

少し冗談っぽく、ただし本心からそう言ってみる。

虚を突かれたのか武則天はひどく驚き、次第に顔が赤くなっていたかと思うと、近場にあった枕を使い襲い掛かってきた。

「うう、マスターのバカあ……っ！ そんな風に言われたら、悪くないって思ってしまうではないか……！ 貴様と一緒にの国とか……そ、それに、貴様との子供じゃと……!!？」
「ええい、とにかく不遜じゃ！ 不遜すぎてびっくりするうー！」

喜んでいるのか嫌がっているのか判別が付かない怒り方だった。

もしかすると彼女のプライドを傷つけてしまったのかもしれない。そう思い、先の言葉を「冗談だ」と言い直すと更に怒られた。

……なるほど、女の子は難しい。